

平成 24・25 年期神奈川県青少年問題協議会

# 「地域で深める親子の関わり」

～子どもを中心につなごう！地域と親子～

平成 26 年 3 月

神奈川県青少年問題協議会

( <http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f5326/> )

# 目 次

## 第1章 審議テーマと本報告書の目的

- 1 審議テーマ設定について・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 本報告書の目的及び対象者・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 3 協議の経過と本報告書の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

## 第2章 親子を取り巻く環境

- 1 子育てへの不安や負担感の増大・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 2 子育てにおける家庭内及び地域とのコミュニケーションの減少・・・・・・・・・・ 7
- 3 地域における親子の居場所や多様な人々と関わる機会の喪失・・・・・・・・・・ 8
- 4 社会的役割を持ち承認される機会が乏しい子ども・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

## 第3章 親子の関わりを深めるために地域活動が果たす役割

- 1 地域活動に親子が参加することの意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- 2 地域で親子の関係を深める意味・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 3 地域活動を通じて親子が関わりを深めていくための視点・・・・・・・・・・ 15

## 第4章 地域活動の実践と課題

- 1 アンケート調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
- 2 モデル事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
- 3 検証結果～地域活動を通じて親子が関わりを深めていくために～・・・・・・ 41

## 第5章 今後に向けて

親子の関わりが深まる地域活動～3つのキーワードと6つのポイント～・・・・45

- 1 キーワード1：「つなぐ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
- 2 キーワード2：「開く」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
- 3 キーワード3：「遊ぶ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
- 4 おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49

## 参考編

審議テーマに関する説明図表・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50

## 資料編

- 1 平成24・25年期神奈川県青少年問題協議会審議経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
- 2 平成24・25年期神奈川県青少年問題協議会委員・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

## 第1章 審議テーマと本報告書の目的

### 1 審議テーマ設定について

現代の青少年を取り巻く課題として、青少年のコミュニケーション力の不足や、自分に自信が持てない青少年の増加（＝自己肯定感の低下）ひきこもり・いじめ等の問題の深刻化などが挙げられる。

その背景として、少子化・核家族化が進行したことによる、子育て家庭の孤立化や家庭における子育て不安の増大、家庭内コミュニケーションの減少、親子間に過干渉・子離れができないなどの問題や地域の人間関係の希薄化、地域交流・世代間交流や体験活動・行事の減少から、地域において青少年を健全に育成する基盤が失われつつあることが考えられる。

< 参考 審議テーマに関する説明図表 >

- 【図表(1) 青少年のコミュニケーション力の不足 (P50)】
- 【図表(2) 青少年の自己肯定感の低下 (P52)】
- 【図表(3) 少子化、核家族化の進行 (P53)】
- 【図表(4) 家庭における子育て不安の増大 (P55)】
- 【図表(5) 家庭内コミュニケーションの減少 (P56)】
- 【図表(6) 過干渉、子離れできないなどの親子間の問題の影響 (P57)】
- 【図表(7) 地域とのつながりの希薄化 (P58)】
- 【図表(8) 子どもの親密圏の縮小、世代間交流の減少 (P61)】
- 【図表(9) 青少年の体験活動の機会の減少 (P63)】

そこで、平成 24・25 年期神奈川県青少年問題協議会は、「地域で深める親子の関わり」をテーマに、地域との関わりの中で青少年の健全育成を図り、中期的な視点で青少年を取り巻く今日的な課題を防ぐことをめざして審議を進める。

審議においては、家族形態が多様化し、地域とのつながりが薄れる現代社会の中で、

- ・地域活動に親子で参加することにより、親子関係を深めるためのポイント
- ・親子が一緒に参加し、親子の関わりを深めることができる地域活動・プログラム
- ・親子の関わりを深める地域活動を効果的にアピールし、多くの親子に、地域活動へ積極的に参加してもらうための方法

について調査・検討を行う。

また、地域において「親子で一緒に活動する」ということを考え、審議の対象は、幼児及び小学生の子どもとその保護者を中心とすることとした。

## 2 本報告書の目的及び対象者

本報告書の目的は、青少年の健全育成の基盤づくりを、親子と地域とのつながりという視点から考え、青少年を取り巻く環境をより良いものとし、様々な問題を防ぐことにつなげるために、地域活動により親子が得られるものについてまとめることである。

また、本報告書は、親子（主な対象としては、幼児及び小学生の子どもとその保護者）、地域活動実践者<sup>\*1</sup>、保育所、幼稚園及び小学校の関係者（保育士や先生を含む。以下「学校等関係者」とする）」を対象とし、各対象者の次のような行動につながることをめざすとともに、これから親になる人をはじめとして、地域で親子に接する様々な方々に向けて、本報告書の内容を県民に広く発信する。

### < 親子 >

子どもは、地域活動に参加することで触れ合う様々な人との多様な経験により、社会性を育む機会を得る。

親は、地域活動に子どもと一緒に参加し、身近な地域において、子育てへの理解者・共感者・協力者を増やすことにより、子育てへの不安や負担感などを改善し、子どもが育つ環境をより良くする。

親子は、地域活動への参加によって様々な気づきを得るとともに、楽しい体験の共有により、親子の良い関係を一層深める。

### < 地域活動実践者 >

地域活動実践者は、親子が地域活動に楽しく参画<sup>\*2</sup>できるよう、これまでの企画や運営方法を見直すことにより、子どもを中心として地域住民と親子がつながることを促し、地域の親子も活動の理解者・協力者となることで、地域教育力を高め、コミュニティの再生や地域の活性化につなげる。

### < 学校等関係者 >

「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」が教育基本法第13条に定められており、学校等関係者は、地域の教育力を高めることが、家庭の子育て不安・負担感を減らすとともに、子どもが多様な学びの機会を得て成長する上で大切なことを認識し、親子と地域活動をつなぐ場や機会の提供などにおいて協力する。

---

\*1 地域活動実践者

本報告書では、自治会活動、PTA活動、子ども会活動、地域の遊び場の運営者、さらには文化やスポーツに関わるサークル活動など、地域を活動の場として、特定の目的の下に活動する個人あるいは団体を指す。

\*2 参画

お客さんとしてイベント等に参加するのではなく、活動の企画や運営から関わること。

### 3 協議の経過と本報告書の構成

本協議会企画調整部会では、平成 24 年度は、4 人の委員が、各自の専門的見地や取組実績を踏まえた意見発表を行った。その内容に基づき、現代の親子を取り巻く環境や課題を整理し、親子の関わりを深めるために地域が果たす役割について考え、地域活動に親子と一緒に参加しながら関わりを深めていくポイントについて検討した。

また、平成 25 年 1 月には、子の立場、親の立場から様々なご意見をいただくための意見交換会を行った。

平成 25 年 3 月に、地域活動に親子と一緒に参加しながら関わりを深めていくポイントを中間報告として取りまとめ、これを検証するため、アンケート調査を実施するとともに、平成 25 年 9 月には、実践するモデル事業を実施した。

これらの経過を踏まえて、本報告書は、以下の構成となっている。

#### 第 1 章 審議テーマと本報告書の目的

…審議テーマ設定の背景や本報告書の目的等

#### 第 2 章 親子を取り巻く環境

…現代の親子を取り巻く環境の整理

#### 第 3 章 親子の関わりを深めるために地域が果たす役割

…地域活動を通じて親子が関わりを深めていくための視点

#### 第 4 章 地域活動の実践と課題

…地域活動を通じて親子が関わりを深めていくための視点についてのアンケート調査、ヒアリング調査及びモデル事業を通じた検証と、親子の関わりを深めるための地域活動の課題の整理

#### 第 5 章 今後に向けて

…今後、地域活動を通じて親子の関わりを深めていくための取組みの方向性

なお、地域活動を通じて親子が関わりを深めていくためのポイントを検証するために行った、アンケート調査を通じて把握した活動事例、ヒアリング調査を通じて把握した地域活動の実践例、さらにモデル事業の実践結果については、別途、普及啓発資料として取りまとめて、親子の関わりを深める地域活動・プログラムが一層充実するよう実施団体や関係行政機関などに向けて情報発信を行う。

## 参考コラム

### 地域とは何か ~ 4つの視点 ~

#### 生活の場

生活していく中での色々な悩みや苦しみ、希望や喜びが生まれる場であり、生活に密着した様々な課題が生成される。地域の人々は、生活者として、現実におかれた条件の下で課題に対処することが求められる。



#### 現実そのもの

メディアや仮想の世界が広がる中で、地域で生活するということは、逃げる事ができない現実の中で行われる。それゆえ、対面でのコミュニケーションや実際のつき合いが大事にされなければならない。地域での経験の積み重ねが、社会生活を営む上での行動や意思決定に重要な意味を持つが、これは必ずしも合理的なものではない。

#### 文化を維持創出させる場

地域では、生活上の慣習や従来からのやり方といった生活文化が、人々の意識や行動の多くの部分を規定している。それは、情緒的な、合理的ではない判断が重視されることにもつながるが、それらの積み重ねにより信頼関係が生まれるという面もある。近所づき合いのように、地域には助け合いや支え合いの原点がある（「お互いさまの関係」の重要性）。

#### 人間関係のかたまり

地域とは、家族、近所づき合い、町内会、同級生の集まりやサークルなど、様々な人間関係のかたまりといってもよい。家庭や会社は、基本的に同質的な集団でいわば閉じており、多様な関係が形成されにくくなっているが、異質な関係性が複合的に入り混じっているのが地域であり、タテ・ヨコ・ナナメの関係がたくさん創出される可能性をもっている。閉じた世界にいる子どもたちを、そうした場に解き放ってあげることが大切である。

## 第2章 親子を取り巻く環境

第1章で設定した審議テーマについて検討を進めていく上で、少子化・核家族化や、地域における人と人との関わりの希薄化など、社会状況の変化が複合的に絡み合い、従来とは大きく異なっている現代の親子を取り巻く環境について、あらためて整理することが重要である。

ここでは、その現状を、子育てへの不安や負担感の増大、子育てにおける家庭内及び地域とのコミュニケーションの減少、地域における親子の居場所や多様な人々と関わる機会の喪失、社会的役割を持ち承認される機会が乏しい子ども、という4つの視点から整理する。

### 1 子育てへの不安や負担感の増大

#### (1) 親モデルを見出す機会の喪失

今の子育て世代は、核家族化やグローバル化が進行した時代に育った世代である。高度経済成長期の中で、社会は効率や成果を求める大人中心のものとなり、地域で群れる子どもの集団が減った時期と重なっている。

また、自分の親との関わりはあったものの、友人の親や地域の様々な大人との接点は乏しく、家族における親の役割に意識を向け、自分に合った「母親モデル・父親モデル」を見出す機会に恵まれなかった世代でもある。

よって、親子関係における「三見」

「自分の親の姿を見て」親とはこのようなものという基礎イメージをつくり

友だちの親の姿や近隣の「様々な親の姿を見て」親像のイメージを広げ

最終的に自分自身が将来「どのような親になるかを見据える力」

の経験が不足しているため、自身が親になっても、どのような親子関係を築けばよいかわからず不安になり、子どもとの関わり方について悩み、子どもを産み育てることに生きがいを見出だしにくい状況にある。

特に父親にとっては、「親になるとはどのようなことか」に関する基本的な情報や体験を得る機会が少ない。

例えば母親に対しては、妊娠すれば「母子手帳」を配布するなどの社会的な仕組みがある程度整っている。しかし、父親に対してはそのような仕組みがなく、公民館などで「父親学級」のような講座があったとしても、育児休暇やボランティア休暇の取得を含めた社会や会社の認識が低いこともあり、父親自身が積極的に学ばない限りは、「親になるとはどのようなことか」についての基本的な情報や体験を父親が得る機会は、まだまだ少ない状況である。

## (2) 親の孤立

親同士が本音でつき合いにくく、表面的なつき合いになりやすい。周りの人たちは上手にできているのに、自分だけ上手くいかないと一人で悩み、孤立している親が多い。

周囲との比較や多すぎる情報により、親が子どもの長所や個性を認めにくくなっている。子どもとどうつき合ったらよいかわからず、自信を持って子育てに向き合うことができない親もいる。育児情報過多による過保護や過干渉、育児不安などにより、親と子の良い関係を築くことが難しくなっている。

親の不安感は子どもにも影響を与えるので、まず親自身の心の安定と、他から認められているという安心感が必要である。

親が子どものことをよくわからなくなってきた時に、家族以外でその子に目を向け、気づいてくれる人がいるという安心感がなく、親が孤立しがちである。親だけに責任を負わされるのではないかと、という不安がある。

子どもを育てることが楽しくなく、義務感や負担感を感じており、自分優先で楽しみたいと考えている親も見受けられる。自分が楽しむのが先という親のニーズが生み出される背景には、社会の中で見守られていない、孤立しているという感覚が強くと考えられる。

子どもとどう向き合えば良いかわからないから2人で家にいられない、子どものペースに合わせた生活をするのがとてもきついと感じている親もいる。親子が集まっても、親は自分たちのおしゃべりに夢中で、その時が自分を解放できる時間となっており、子どもの成長を皆で見守る、楽しむ、こんなことができるようになって嬉しいという話をするのが、親同士でできていないのではないかと。

社会の大人が、子育てを見守り、サポートするという雰囲気をつくっていくことが必要である。

## (3) 子育てに関するプレッシャーやストレス

現代は、親が自分たちだけで子どもをきちんと育てなければならないという、子育てにおける重圧感が強い。もっと子育てを楽しめるように、親のプレッシャーをほぐす必要がある。

子どもが転んでケガをしても大丈夫、自由に遊ぶとこんなに創造的なことができるというような、本来人間が持っている自然的な力を多くの親が信じられるようになれば、親たちが楽になれる。

人と人との関係が寸断され、何かあると誰かに責任がなすりつけられるような時代であるが、もっと皆で子育てを担い、楽しむ体制ができると良い。

女性の社会進出が進む中、女性の生き方が多様化している。近年の女性と従来の女性の価値観が変わってきたのは「母親観」、すなわちイメージである。結婚して子どもをもつことへの期待は抱くが、一方では育児に専念することは社会から取り残されることのように感じたり、今まで築きあげてきた仕事やキャリアが断絶するのではないかと、過度の失望や不安を感じる傾向が出てきた。

合理主義・競争主義等の価値観から、効率的ではない「子育て」に対して、喜びや生きがいよりもストレスばかりを感じることもある。

日常生活の中で遊びの空間が必要であるという子ども側の事情と、子どもの声がうるさいと苦情を言う人もいるという暮らしの中での制約とのギャップから、親が子どもをのびのびと育てることができないというストレスを感じている。

## 2 子育てにおける家庭内及び地域とのコミュニケーションの減少

### (1) 家庭内コミュニケーションの減少

全国的に少子化、核家族化が進んでいる。

例えば3人家族では、朝起きたら、父親は会社に出勤して不在であり、後に残された母親と子どもとが、2人で暮らしているというのが実情である。母親は1人で頑張り、燃え尽きてしまいがちな環境に置かれている。

また、家族形態が多様化しており、共働きや一人親の家庭においては、子どもと向き合う時間が取れず、子育てに悩みを抱えている場合もある。

1世帯当たりの家族の人数が極端に少人数化していることから、親子ともに、家庭内でコミュニケーションを取る相手や時間が少なくなっている。

また、現代は親子ともに多忙で、互いに関わる時間が短いため、親子の対話が少なくコミュニケーション不足になりがちである。たとえ子どもと向き合う時間があっても、対話というのではなく、子どものことが気になり、親が一方的に子どもを人と比較したり、口や手を出して干渉してしまうなど、子どもの自立や主体性を延ばすことを難しくしてしまうこともある。

### (2) 子育て家庭と地域とのコミュニケーションの減少

子育てには地域の人々の支えが必要であるが、都市化・核家族化の進行や、地域のベッドタウン化・消費タウン化<sup>\*1</sup>による地域社会の崩壊に伴い、親子や家族が、地域から孤立する傾向が見られる。

親子の孤立化と密室化を防ぐために、地域に「タテ・ヨコ・ナナメ」の人間関係<sup>\*2</sup>を回復させ、地域で子育てを支えることが、喫緊の課題である。

親子関係中心のある種のプライバシーの空間ができて、家庭内の関係がクローズドになっており、自分の家庭の中の話を外の人に見せるのは恥ずかしいというような風潮がある。親は、数少ない子どもに愛情を注いでいるけれど、それが外には広がらず、家庭の外の人とのコミュニケーションが起こらないだけでなく、信頼関係や助け合いの基盤ともなる互酬性<sup>\*3</sup>の関係も築かれにくくなっている。

\*1 消費タウン化

交通や情報網の発達により、職住一体の生活共同体という地域社会の性格が薄れ、職住分離と消費生活優先の場になることを指す。

\*2 「タテ・ヨコ・ナナメ」の人間関係

親・祖父母と子ども、先生と児童・生徒などの人間関係を「タテの関係」、同年齢や同級生の子ども同士などの人間関係を「ヨコの関係」、異年齢同士や地域の大人と子どもなどの人間関係を「ナナメの関係」と言う。

\*3 互酬性

互いに報酬を与え合う関係。

ヨーロッパでは、高校生がつくった料理を食べながら、地域の一人暮らしのお年寄りや高校生とがパーティー形式で世代間交流を行うという例があるが、少しでも良いからプライバシーをオープンにして、相手にも物やサービスを与える、オープンにすることにより相手からももらう、という関係を築くことが大事である。

### 3 地域における親子の居場所や多様な人々と関わる機会の喪失

#### (1) 子どもの遊び場の変化

都市化が進み、子どもの生活空間から、自然豊かな場所や、路地裏、広場といった自然発生的な子どもの遊び場が少なくなっている。また、情報化の進展により、外で遊ばない子どもや、テレビゲーム・インターネットなどの室内型遊びに興じる子どもたちが激増している。

その上、ニュースや事件の影響で「知らない大人について行くと危険がある」という過度な不信感が生まれ、地域の大人たちが子どもと関わろうとしない風潮があり、子どもに関心を払わなくなってきた。あるいは、子どもに関わりたくても関われない、関わり方を知らないという悪循環が生まれている。

#### (2) 親以外の大人との関わり

子どもは、保育所、幼稚園及び小学校のクラスでは、同年齢以外との交流は、担任の保育士・先生としかできない場合が多い。

今の社会のあり方では、世代間のつながりというものが薄れてしまう。意図的に色々な行事を企画したり、イベントを行って様々な世代の人たちが関わるということをしなないと、放っておいたままではつながりはできない。

保育所、幼稚園及び小学校や家庭以外の子どもの居場所が少ない上、学校や習い事の先生など、親以外の大人と子どもとの関わりが「教える／教わる関係」に終始しがちになっている。「教える／教わる関係」以外の大人との関係の中で子どもが育つということを、親があまり意識していない。また、そのような関係に子どもが触れる機会も少ない。

子ども向けの施設や活動もあるが、そこでの大人の姿勢が管理責任を恐れる風潮もあり、様々な背景や状況の子どもを受け止める姿勢が弱く、子どもがそのような場所を選ばないことも多い。

#### (3) 親の多様な交流の場や機会の減少

子どもだけでなく親の方も、世代間交流の場がなく、子育ての経験者などに気楽に相談できる場所がない。子育て世代のネットワークが狭く、特に、親が就労している家族同士のつながりが弱い。

ヨーロッパでは、教会を核としたコミュニティや趣味の仲間など、関係が多面的で、網の目状のネットワークの中に家族が成り立っている。日本の場合は、仕事関係のつながりが中心であり、家族の各メンバーのネットワークはそれぞれ別世界で、

交わらないようになっている。成熟社会と言われている割には、家族を支えるネットワークが脆弱である。

#### (4) 他者との関わり方の変化

社会が消費型へと変化したことにより、子どもの頃から小さな消費者として扱われ、大人・子どもともに、サービス等を受け取る側の消費者感覚・お客様感覚が身についている一方で、人と一緒に何かをつくるという経験が少なくなってきた。

また、情報化が進み、人と関わらなくても生活していくことができる社会の中で、年齢が上がるにつれて子どもの親密圏・仲間意識が縮小し、親しい仲間には非常に気を遣ったり、空気を讀んだりするが、外側の世界にはアンテナが鈍くなる傾向がある。また、大人も含め、問題処理は人に委ねて自らは傍観者を決め込む、自分はいつもサービスが提供される側にいたいという傾向も見られる。

このように、他者との関わり幅が狭くなりつつある中で、どのようにして子どもを社会的な人間に育てることができるかという問題が突きつけられている。

子どもにとっては、小さなケンカ、トラブルやリスクを、自分たちで解決・処理していくという経験を積むことが大事であるが、情報化の進展により、情報を得て1人である程度のことのできることから、他者との多様な関わり合いの中から学んでいくという機会が乏しく、デリケートで傷つきやすい子ども・若者が増えている。

知識はあるが、自立と社会性という面で弱く、ひきこもりや不登校を含め、社会に出たくないという子どもも増えている。

## 4 社会的役割を持ち承認される機会が乏しい子ども

### (1) 子どもの出番の減少

海外では、13歳からベビーシッターをするという文化を持つ国もあるが、日本では子どもが信頼され役割を果たすというような子どもの出番が少ない。子どもが社会的に認められる機会がないことが、自己肯定感が低い子どもの増加にもつながっている。

### (2) 管理される子ども

子育ての上で、親はできるだけ無難な、何もトラブルが起きないような形を望んでおり、子どもを取り巻く環境が、管理的な方向へ入っていきがちである。子どもが成長するにつれて、自分を出していくのは自然なことであるが、小さい頃から上手に皆と一緒にやるように言われながら自分を出さないように育てられ、かつ自分たちの力を発揮する場面も減っているという中で大人になり、自立することは難しい。

## 参考コラム

### 地域家族の回復 ～地域の多世代が育てる子ども～

日本の社会構造の変化に伴う地域社会の崩壊が、子どもたちに大きな影響を与えている。

人間形成の過程には次の3層\*があるが、の「役割と社会的承認」の場が、非常に縮小してしまった。かつては、お祭りでお神輿を担いだり何かを皆に配るなど、地域の中で子どもが手伝う・役割を果たすという場面があったが、地域社会の崩壊に伴い、「役割と社会的承認」の場が地域から消えている。

#### 愛情と存在承認

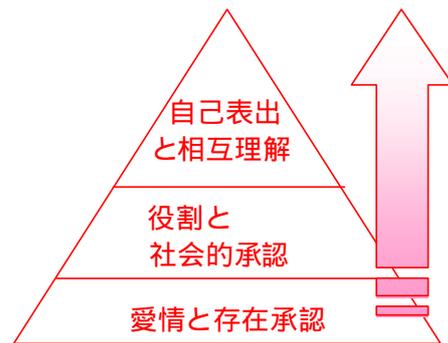
存在の保護、いのちのケア

#### 役割と社会的承認

子どもにもできる役割・仕事を大人たちと一緒にやり、子どもを褒める。

#### 自己表出と相互理解

自他の違いを認め合い、多世代と一緒に活動する。



子どもは、多くの子どもたち、大人たちと関わり合う経験を通して「一人前の大人」になる。親子、先生と生徒というタテ関係だけでなく、ヨコ・ナナメの関係づくりが重要であり、多世代間の交流が求められている。

また、子どもが家庭、学校、地域で役割を果たし社会的承認を得る場をたくさんつくることにより、子どもたち自身が家を、クラスを、地域をつくっていくことが大事である。現代のように、学校中心の人間形成ではなく、地域や学校の行事などへ地域の方々にも参加してもらい、それらを皆で一緒につくっていく。学校と地域とが一体となって学校をつくる。その中で子どもたちが、自分たちができることをやるという機会が必要である。

\* 心理学者 アブラハム・マズローの欲求の5段階を改編

## 第3章 親子の関わりを深めるために地域活動が果たす役割

第2章で整理した現状に対して、平成24・25年期神奈川県青少年問題協議会では、「子どもを中心として親子が一緒に地域活動に参加し、その中で、親子の関わりを深めていくこと」が、問題解決の大きな一歩につながると考えた。

ここでは、地域活動に親子が参加することの意義と地域で親子の関係を深める意味について整理した上で、地域活動を通じて親子が関わりを深めていくための視点をまとめる。

### 1 地域活動に親子が参加することの意義

#### (1) 親子にとっての意義

##### 家庭内コミュニケーション不足の解消

地域活動に親子で一緒に参加することにより、親子のコミュニケーション不足を補うことができる。例えば、親子で参加できる子ども会や放課後子ども教室<sup>\*1</sup>などの活動に参加すれば、キャンプや工作、スポーツなどを通して、自然に親子間のコミュニケーションが増える。

##### 地域の人との関わり、親同士・子ども同士の関わり

子どもをきっかけとして地域の活動に参加することは、地域の様々な人と協調し、つながりを深める良い機会となる。

親にとっては、活動を通じて、子どもの友だちやその親とも知り合うことができるほか、「地域全体の親」としての自覚を持ち、互いに助け合う共助の気持ちが醸成される機会となる。

子どもにとっては、地域の子どもの同士という、保育所、幼稚園及び小学校以外の関わりが生まれる。

##### 子どもにとっての新たなチャレンジの場

子どもにとって、地域は、親や保育士・先生以外の多様な大人に見守られて活動にじっくり取り組むことができ、自分の力を試し、認められて育つことができる場である。家庭や学校も子どもにとって重要な環境であるが、それらは地域の中にあり孤立していないことが望まれる。

##### 子どもの育ちを見守ってくれる仲間づくり

子どもにとっては、開かれた保育所、幼稚園及び小学校・家庭・地域の中で育つことが大切である。

今では地縁・血縁が崩壊しているので、人がつながる新しい方法として、子どもを中心として人と人がつながる「子縁(こえん)」を活用する。「子縁」は、

\*1 放課後子ども教室

小学校の余裕教室等を活用し、地域の多様な人々の参画を得て、子どもたちとともに学習やスポーツ・文化活動等の取組を支援する、文部科学省の施策の一つ。

子を持つ親はもちろん、子どもを持たない人や、子や孫がいない、又は同居していないお年寄りなどにも拡大させて、地域社会で様々な人と人をつなぐ新しい縁結びの考え方である。

#### 父親の活躍

父親は、父親としての体験をたくさん積まないと、なかなか父親になることができない。地区の防災被災訓練など、父親の出番がある地域活動に子どもと一緒に参加することが、父親体験を積む良い機会となる。

#### 親子で一緒に前を見る機会に

閉じられた家庭・親子関係の中で、親子が向き合うだけの子育てではなく、地域活動への参加を通じて、外の世界に出ることが大事である。親子が向き合い、子どもだけを見ているという親の視線の集中が、地域に出る・目を向けることにより、親と子どもとが一緒に前を見るというような変化につながるきっかけとなる。

## (2) 地域にとっての意義

#### 地域のつながりの再生

親子で地域活動に参加してもらうことによって、地域の大切さ・温かさなどを親子に認識してもらう機会とすることができる。

子育てというものは、子どもを媒介として人がつながるものである。子どもを通して、親子と地域の大人とが関わる機会をつくり、地域のつながりを再生する。

また、大学のような、地域で大きな核となる場所でリーダーを集めて会議を行うなど、親子で集う活動同士がつながることや、ネットワークを広げる人材の育成に取り組む必要がある。

#### 安全安心に暮らせるまちづくり

日頃交流の少ない親子と高齢者、特に独居高齢者との世代間交流の機会をつくることにより、地域の安全活力<sup>\*2</sup>が高まる。

子どもをきっかけとして、親子に地域活動に参加してもらうことにより、安全で安心な子育てがしやすい住みやすい地域づくり、生涯学習や福祉のコミュニティを形成することができる。

また、ノーマライゼーション<sup>\*3</sup>社会や、ソーシャルキャピタル<sup>\*4</sup>の高い地域を創り出し、地域における課題発生の未然予防につながる。

---

\* 2 地域の安全活力

住民が様々な地域活動に参加し、名前と顔が一致する人々が多い活力のある地域はより安全であるという、犯罪を未然に防止する考え方。

\* 3 ノーマライゼーション

高齢者や障害者等の社会的弱者が区別されることなく、他の人たちと一緒に社会生活を営むことが、本来の望ましい姿であるとする考え方。

\* 4 ソーシャルキャピタル

人間が生活を営む場には、「信頼」や「生活規範」「コミュニケーション行動」といった、人間関係の成熟によってもたらされる価値が蓄積されており、こうしたものが多ければ多いほど、経済活動を含めた人々の社会的活動が活性化し、社会の効率性が高まるという考え方。

### (3) 保育所、幼稚園及び小学校にとっての意義

子どもが抱える課題を皆でフォロー

保育所、幼稚園及び小学校が地域活動の場となれば、参加する子どもの変化や背後にある家庭が、地域住民に見えるようになる。例えば小学校の場合は、学校支援地域本部や放課後子ども教室などの活動場所とすることなどが考えられる。

子どもが抱える課題を、保育士・先生だけがフォローするのではなく、地域の人たちも子どもの様子を通じて家庭の姿を知ることができる。それが、開かれた家庭や保育所、幼稚園及び小学校にしていく方法の一つともなる。

地域教育とのバランスの回復

子どもの意識や行動が変容していくことも教育の一部であるが、今の教育は、どちらかといえば知識や技術の獲得を中心に構成・運営されている。

親や子どもに、自分はお客という風潮があるが、一人ひとりの参加意識や生活の中で、問題の解決法を相互に皆で考えていくというような学びの重要性を、地域だけでなく、保育所、幼稚園及び小学校においても意識することが大切である。

かつては、学校教育と地域での教育は、互いに協力しバランスを取っていたが、地域の衰退と学校教育における受験勉強の激化といった二重の影響により、そのバランスは崩れてしまった。保育所、幼稚園及び小学校と地域との連携協力という形で、徐々に良い方向に持っていくことが必要であり、そのためには、各保育所、幼稚園、小学校及び地域で、個別具体のテーマを共有し、様々な形での連携協力関係を創出していくことが重要である。

## 2 地域で親子の関係を深める意味

### (1) 地域は多様な関係の宝庫

子育て(家庭教育)は、普遍的な価値や技能を教え込むことと思いがちであるが、子どもは、もっと自由に、色々な人と関係性をつくることで、自ら学び、自分や社会のための価値を創り出していくことができる。子どもを含め、人間は人との関係の中で育っていくものである。

子どもは、子ども同士、親子、地域の人たちとの間に個別の信頼関係を築き、多種多様なコミュニケーションを通して自ら成長していく存在であるという認識を広げ、それを実現できるような環境をつくっていくことが重要である。

地域社会にはタテ・ヨコ・ナナメの関係が豊富にあり、地域の様々な年代の人たちやお店屋さんとの関わりなど、家庭や保育所、幼稚園及び小学校とは異なる関係の中で、子どもは自ら育っていく。

多様な関係の中で成長するためのきっかけづくりの一つとして、親子で地域活動に参加することは、地域の中で、親子が様々な人と関わりながら、豊かな体験・学びを得て、親子の関係を深める良い機会となる。

地域は、子どものコミュニケーション・チャンネルを多元的にし、生きる力を身につける上での基盤を提供することができる。

豊かな成熟社会をつくっていくには、「労働・経済活動」と「個人の生活」を調和させる「ワークライフバランス」だけでは不十分であり、誰もが地域のコミュニティの一員としての役割を果たす「ワークライフ・コミュニティバランス」社会の実現が求められる。

## (2) 地域は子どもの生活の場

地域は、親や保育士・先生以外の人との日常的な関係を結ぶことにより、子ども自身が「この地域に生きていることは楽しい」と感じられる場である。

親にとっては、自分以外にも子どもの顔と名前を知り、親しみを持って接してくれる人がいるという安心感を持つことができる場であり、親が普段子どもに対して言っていることを追認してくれたり、他にも色々な見方があるということ相対化して伝えてくれたりする、第三者的な役割を地域が果たしている。

2050年までの予測では、子どもが減り続け、65歳以上の高齢者が増え続ける時代となる。地域住民の中でも、地域で多くの時間を過ごす子どもと高齢者との世代間交流が必要となってくる。

## (3) 地域は親子にとっての学びの場

社会教育は実践的なものが求められ、色々な人が結びつき、相互教育が成り立つという3つの特徴<sup>\*5</sup>があり、その観点から見ると、社会教育を実践できるのは地域しかない。したがって、地域が本来持っている特色、特性や様々な関係性というダイナミックな教育的機能を引き出せば、子どもだけでなく親も、様々な形で学び、気づき、成長・向上していくことができる。

なお、ここでの学びとは、知識や技術を獲得する(=Learning to have)ことではなく、意識や行動を変える(=Learning to be)ことを意味している。

## (4) 家庭の中だけでは不十分なものを補うのが地域

人と関わる力は、まず家族の中で培われる。子どもは、家族の中で人を見極め、評価し、関わる力を身につけ、その上で地域の人へと関わりを広げていく。しかし、少子化・核家族化の影響で、家族や兄弟が少ない現代の子どもは、家庭の中だけでその力を十分に養うことは難しい

---

\* 5 社会教育の3つの特徴(寺中作雄(1946年文部省社会教育課長)の説明より)

1 実践教育であること

地域の団体やクラブに所属し、その運営の実際に触れることによって初めて目的を達成できる。  
...実践することによって色々なことを学ぶ。

2 相互教育であること

自分が会得したことを皆で自由に討議、研究、質疑し合うことによって、相互に見識を身につけられる。  
...皆が集まり議論することによって、様々な問題について、多様な見方で考えることができる。

3 総合教育であること

情操の陶冶や科学的知能の啓発等を含めた総合教育として実施する必要がある。  
...体系的なものというよりも、多面的なアプローチやものの見方が大事である。

家族の中だけで全部を賄おうとすると、子どもが家族以外の人とつながりを持ち、社会性を身につけるといいう機会が乏しくなってしまう。家族の中だけでは不十分なものを完結させるのは地域社会であり、もう少し親子と地域との結びつきを強め、家族以外の人と親子に関わることができる環境が必要である。

### 3 地域活動を通じて親子が関わりを深めていくための視点

#### (1) 親が企画や運営に参加し、地域の大人と交流できる

親にとっては、地域活動に自分たちも企画・準備からふりかえりまで参加することを通じて、大人同士が本音で話せるつながりへと発展する機会を持つことができる。地域活動への参加が、親子同士だけでなく、地域の大人も巻き込んだ世代間交流の場となると良い。

特に、保育所、幼稚園及び小学校や地域の活動への父親の参画は、子どもと父親とのコミュニケーションを増やし、そのような父子の姿を目にすると母親は安定する。父親の参画が、母親の安定感や、様々な家族問題が起きにくい家族となることへとつながる。

#### (2) 親子が主役になって楽しめる

親子で参加することができ、一緒に楽しめる活動を、親子のニーズを汲みながら実施する。父親、母親、子どもそれぞれが主役になることができ、皆が興味を持てるもの、一緒にやって面白いと思わせるような仕掛けが必要である。小学4年生以上の子どもにとっては、自分たちも企画段階から参加でき、子ども同士で関われる活動であると良い。

親子が参加する地域活動を運営する上での注意点は、「サービスする人/サービスされる人」という関係をできるだけつくりたくないようにすること。そのことが、「クレームを言う人/言われる人」という関係を少なくし、より自由な活動を可能とする。

#### (3) 気軽に（負担に感じずに）参加できる

イベントなどの地域の集まりへ多くの人に参加してもらうために大事なことのひとつが、「参加者の負担感がない」ことである。「あそこへ行ったら役員や仕事をやらされる」というのではなく、「あそこへ行ったら面白い」「こんな話を聞くことができる」というような、参加者にとって負担感のない、ゆるい形にすることにより、多くの人に集まってもらうことができる。

その中で、参加者が人との関係の深まりに面白さを感じたり、参加者の自主企画により様々な行事が循環していったり、活動について広く発信する人が現れたり、負担が大きいことも参加者が思わずやってしまうという形に発展していくことが望ましい。

現代は、多くの人が「もてなしを受けること」に慣れており、自ら進んで何かをするということがなくなってしまっている。活動を企画する側は、そのことを念頭に置いて、参加者の負担感をなるべく和らげつつ、知らず知らずのうちに参加者が育っていき、気づいたら参加者がやっていた、参加者の意識が変わっていた、という仕掛けが大事である。

子育て中の親子は、まずは自分たちを助けてもらいたいという気持ちで参加することが多い。しかし、助けてもらいながら親自身が成長し、楽しい活動をしたという積極性が出てきて、時間が経てば、今度は自分が助ける側に回っているということもある。

親たちの憩いの場として親子が集まるということもあるかもしれないが、それでも家にいるよりは良い。皆で気楽におしゃべりしていれば、子育ても少し楽になるだろうし、その中で人との関係を広げながら、親たちの感覚も広がっていく。心のゆとりを持てるようになり、段々と外に目が向いて、新しい参加者に対して自分がサポートをする側に回ることもできるようになる。

子育て中の親子向けの活動においては、親子を支援するというよりも、むしろ参加者の親の力を借りるとか、親の力が生きるような仕掛けをするということも必要である。活動を通じて、参加した親が充実感を得て家に帰ることができれば、また元気に子どもに向き合うこともできる。

#### (4) 参加者同士の対話やふれ合いを重視する

親子の対話が増えるような体験ができる、他の親子ともふれ合い、経験を共有できるような活動が望ましい。

ただ人数を集めることだけを目的とした企画に頼ったイベントをしない。親子と地域をつなげることを目的とし、参加者同士の会話が生まれるための空間づくりや仕掛けを考へることや、親が、自分の子どもだけでなく、よその子どもとも関わられるような仕組みとすることが大切である。

また、参加者同士の対話やふれ合いを進めるために、活動の場に、先生のような立場ではなく、人と人をつなげる役割を果たす、やわらかく常駐する人が必要である。参加者同士だけでは、お互いの子どもの行動について神経質になりがちであり、特定の人の意見に引っ張られて参加者がストレスを感じるということもあるが、第三者的な立場で仲介役となってくれるスタッフがいると、参加者が程よい距離でおつき合いできる。

#### (5) 地域住民と専門的な知識や経験を持った人材をつなぐ役割を地域の人が担い、3人以上で企画する

地域活動においては、「その地域で生活する住民」と「有識者や NPO 団体のような、専門的な知識や経験を持った人材」をつなぐコーディネーターが必要である。この役割を自治体が行っている場合もあるが、地域の人がコーディネートすることが、地域活動の活性化や地域社会の再生に結びついていく。

何かをしなくても引っ張っていく人がいない、言わばリーダー的な存在が不在であるという問題があるが、そのような役割の人材を育成するということではなく、地域の中にそのような人材の卵のような人がいるという発想が大事であり、そういう人を見つけて、十分に活躍してくれるような環境を与えると考える方が良い。

基本的には内発的なものであり、人材育成というよりも、井戸端会議や地域のたまり場でアイデアを語り合う住民同士の密接な関係づくりの問題と考えてよい。

活動を行う上で、相手方のメリットやデメリット、デメリットを超えるメリットを相手方に感じてもらうにはどうすれば良いかを、3人以上の賛同者でよく考えると良い。

#### (6) 参加者の工夫・発想を大事にする

地域は、遊園地のように、親子が一緒にお客さんとなって楽しめる場所ではなく、自分たちで工夫して遊びをつくり出したり、遊びの輪を広げたりする、創造的な場所である。親子自身が活動を生み出すことができるような機会・場を、地域が様々な形で用意できると良い。

親子が参加しやすいよう、「親が子どもをみていなければならない」ではなく、大人も子どもと一緒に活動に参加しながら、自分の発想で関われる余地をつくること。「遊び心」をキーワードとし、大人の心のハードルを下げるような活動が大事である。

より自由な活動を可能とするために、危険管理や空間づくり、グループワークを学ぶと良い。主催者側が「負の決定の連鎖」に陥らないための手段を、日常的に意識していることが大切である。

#### (7) 地域行事や学校など身近な機会や場を活用する

子ども、若者、大人という多世代が関わり合うことのできる行事、イベント、まちづくり活動を住民主体で回復・実施し、行政はそれを支援することが望ましい。

また、保育所、幼稚園及び小学校などの施設を親や地域住民と共用し、学校等を舞台とした学校外教育・活動を行うことにより、子どもが集まりやすい場において世代間交流を図ることができる。学校等の施設を地域住民のサークルの活動場所とすることにより、新たに入所・入学してくる子どもの親が参加しやすく、循環性も起きる。

例えば放課後子ども教室では、放課後や休日の使われていない学校施設を有効活用する形で、親や地域住民の協働により様々な教室が実施され、世代間交流が推進されている。これらは学校外活動であることから、学校関係者に頼らず、住民自治で運営することを心がけなければならない。学校関係者の休日等の権利を保障し、子どもを地域で見守る「住民自治力」を養うことが大切である。

(8) 強制はしないで自由に参加できるようにする

子どもを持つ親は、忙しいのが現状である。よって、地域で時間・精神的に多少余裕ができてきた年配の世代が「大丈夫だよ」「忙しい時期は、皆順番に過ぎていくから」というまなざしで若い親に接することにより、若い親自身に時間・精神的余裕が生まれれば、又は自分にもできることがあれば、地域活動に積極的に参加する親も出てくる。

参加の自由について考えるとともに、若い親に対して参加の強制はしないことが大事である。

(9) 地域の力（人と人をつなげる力や学校等を支える力など）を借りる

保育所、幼稚園及び小学校が地域に開放され、学校等を中核として、保護者、特に父親を巻き込みながら、人と人とのつながりのあるコミュニティに組み換えていく活動が必要である。小学校においては、児童数の減少により余裕教室（空き教室）が増えており、それらを親や地域住民の様々な生涯学習の活動や世代間交流の場として開放する所も出てきている。

保育所、幼稚園及び小学校支援の中に地域住民や親子が入っていき、支援しながら地域住民と親子がつながっていくという形が望ましい。孤立した親子が、地域活動を通じて学校等とつながる、特に父親は、子どもと一緒に活動に参加しながら、父親経験を積んで段々と父親になっていくことができる。

保育所、幼稚園及び小学校などがきっかけづくりを担わないと、そのような機会の実現は難しい。

(10) 子どもの魅力を親に伝えることを意識する

親が子どもに関心を持ち、子どもとの関わりを持とうとするのは、乳幼児期から児童期前期くらいまでである。子どもを未熟な存在として、早く大人のように振る舞うことを急かすよりも、健気に、そして繊細に、一生懸命生きようとする子ども本来の魅力を、日々の保育や行事等の機会を通して、保育士・先生が親に伝えていき、子どもを大事にする社会の実現につなげることが大切である。

特に保育所や幼稚園のような場所を開き、皆で子どもの成長を喜び、嬉しいと思うような機会をつくることできると良い。

子どもの世界には、大人が失ったものがたくさんある。発達ということは、あるものを獲得する一方であるものを失うことであり、必ずしも良いことばかりではない。子どもと一緒に遊んだり、子どもと関わることで、効率主義や、いつも先へ先へと前もって準備する中で大人が見失ってしまったものを取り戻す。

(11) 地域に参加する楽しさや面白さを育てることを意識する

親が地域に参加しようとするためには、自分の子どものことだけを考えていては難しい。色々な子どもと関わることで、自分の子どもも育っていくという意識に

変えていくには、親が自分以外の子どもとも関わり、その楽しさや面白さを感じる機会を持つ必要がある。子どもは子ども同士の関わり合いの中で育つことはもちろん、親も親同士が関わり合う中で、これまでの自分とは違った自分を発見し、成長していく。

このような機会を、保育所、幼稚園及び小学校が提供できれば、親は自然と地域活動に参加するようになり、子どもの成長を支える基盤づくりにもつながる。

(12) 親同士をつなげる機会を増やし地域を再生(学校等を支える地域を活性化)させることを意識する

子どもが小さいうちは、子どもを仲立ちとして親同士がつながっていくことが多い。保育所、幼稚園及び小学校という子どもが集まる場を通して、新たな地域ができていくとも言える。これらの場所を拠点に、親同士の交流を目的としたサークルや行事を企画するなど、子どもだけでなく大人もつながっていくような仕組みをつくるのが、保育所、幼稚園及び小学校を支える地域の活性化にもつながる。

## 学校・家庭・地域住民との協働

教育基本法第13条「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」を受け、学校・家庭・地域住民との協働事業が進みつつある。例えば、文部科学省による施策である学校支援地域本部\*事業では、親（保護者）や地域住民が参画しての登下校時の子どもの安全確保や校舎内の安全確認、生活科や総合的な学習の時間・音楽科・家庭科・クラブ活動ほか、様々な授業への協働や、地域のお店や事業所との協働によるキャリア教育が推進されている。このような地域と小学校との協働は、特に親にとっては「自分の子どもがお世話になっている」との感覚から、多少の義務感があるとしても、比較的どこでも参加の割合が高いようである。

### 学校の空き教室を活用した交流の場の確保

～ 千葉県習志野市立秋津小学校の事例 ～

学校によっては、児童数の減少により生じた余裕教室（空き教室）を、親や地域住民の生涯学習の活動や世代間交流の場として開放する所も出てきている。例えば秋津小学校では、4つの余裕教室と余裕敷地約300㎡及び陶芸窯付の小屋を地域に開放している。これらを運営する秋津小学校コミュニティルーム運営委員会は、サークルやPTA・地縁団体などで構成された生涯学習の推進団体である秋津コミュニティ内部に、役員が重任する形で組織されている。一部の委員がコミュニティルーム入口の鍵を管理・保管することにより、利用を希望する親子・住民は、放課後・休日を問わず、朝の9時から夜の9時まで、鍵を借りて自由に利用できる。ここでは、学校支援地域本部の協働事業の推進により、様々なサークルが放課後子ども教室を開催している。

### 学校を中心とした安全な地域づくり

秋津小学校は、市から災害時の避難所として指定され、防災倉庫が設置されていることもあり、その備品を借りて防災被災訓練を兼ねた一泊キャンプなどが行われている。これらの活動を基として、平成23年の東日本大震災の際には、主にお年寄りがコミュニティルームへ避難し、住民自治により2日間の避難生活を送ることができた。

この間、教員は「帰宅難民」になった親の子どもを体育館に集め、子どもをみることに専念できたのである。このように、地域住民の活動の場所を学校に置けば、災害時の住民自治による避難生活を含めた多世代による活動・交流が可能となり、毎年新たに入学してくる子どもの親が参加しやすく、世代の循環も容易に起きる。なお、学校施設開放の際の留意点は、学校施設開放に伴う管理運営のあり方や安全管理について、学校管理者である校長や所轄の教育委員会と十分に協議する必要がある。



\* 学校支援地域本部

学校の教育活動を支援するため、地域住民の学校支援ボランティアなどへの参加をコーディネートする、文部科学省の施策の一つ。

## 第4章 地域活動の実践と課題

第3章でまとめた「地域活動を通じて親子が関わりを深めていくための視点」を検証することで、今後の取組みの方向性について検討する。

ここでは、「地域活動を通じて親子が関わりを深めていくための視点」を用いたアンケート調査を通じて、実際に地域活動を実践する上で意識している点について把握すると共に、「地域活動を通じて親子が関わりを深めていくための視点」を踏まえたモデル事業の成果に基づいた検証を行い、今後の課題を整理する。

### 1 アンケート調査

#### (1) 実施概要

実施時期：平成25年5月20日～平成25年6月21日

調査方法：郵送による配布、ホームページへのアンケート掲載、FAX、電子メール、ホームページからのフォームメールによる回答

調査対象：県内の子どもの育成支援に関わるNPO、子ども会、青少年指導員、青少年団体、社会福祉協議会、放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点、児童館、行政<以上、地域活動実践者>、保育所、幼稚園、幼児教室、小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携<以上、学校等関係者>など県内約1,000団体

回答数：321件

質問内容：「地域活動を通じて親子が関わりを深めていくための視点」としてとりまとめた12の視点を意識して活動しているか（現在及び今後）選択回答

その他：平成25年7月～平成25年10月、アンケートに回答した団体の各属性から1団体以上を選定し、その14団体の代表者等に対して、地域活動の中で親子の関わりを深めるための視点についてヒアリング

ヒアリング調査先

団体名	団体名
(特非)地域家族しんちゃんハウス	(社福)小田原市社会福祉協議会
つどいの広場どれみ	認定こども園仙石原幼児学園
片瀬地区子ども会連絡会	開成町立開成小学校
(特非)ワーカーズ・コレクティブキャンディ	渋谷きんりん未来の会
茅ヶ崎市立円蔵小学校	旭町こども文化センター
(特非)横浜にプレイパークを創ろうネットワーク	中央林間小学校おやじ達の会
(特非)葉山風の子	伊勢原市青少年指導員連絡協議会

## (2) 実施結果の概要

### [ 団体の属性 ]

区分	回答数	割合
NPO（任意団体を含む）	41	12.8%
子ども会	42	13.1%
青少年指導員、青少年団体	30	9.3%
社会福祉協議会	22	6.9%
保育所、幼稚園、幼児教室	76	23.7%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	9	2.8%
放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点	27	8.4%
児童館	55	17.1%
行政	19	5.9%
計	321	100.0%

### [ 大切にしている視点 ]

網掛けは保育所、幼稚園、小学校のみ回答

実施するに当たって大切にしている視点	全体		件数内訳	
	件数	割合	現在	今後
保護者が企画や運営に参加し、地域の大人と交流することができる	118	36.8%	42	76
親子が主役になって楽しむことができる	233	72.6%	152	81
気軽に（負担に感じずに）参加することができる	259	80.7%	167	92
参加者同士の対話やふれ合いを重視している	263	81.9%	170	93
地域住民と専門的な知識や経験を持った人材をつなぐ役割を地域の人が担い、3人以上で企画している	84	26.2%	39	45
参加者の工夫・発想を大事にしている	101	31.5%	42	59
地域行事や学校など身近な機会や場を活用している	123	38.3%	61	62
強制はしないで自由に参加できるようにしている	209	65.1%	115	94
地域の力（人と人をつなげる力や学校等を支える力など）を借りている	38	44.7%	17	21
子どもの魅力を親に伝えることを意識している	48	56.5%	31	17
地域に参加する楽しさや面白さを育てることを意識している	30	35.3%	7	23
親同士をつなげる機会を増やし地域を再生(学校等を支える地域を活性化)させることを意識している	35	41.2%	15	20

### (3) 実施結果の詳細

保護者が企画や運営に参加し、地域の大人と交流することができる

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 55.5%、「子ども会」が 52.4%となっている。現在、意識しているのは、「子ども会」が 23.8%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が、22.2%、今後、大切にしたいと考えているのは、「児童館」が 36.4%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 33.3%となっている。

区分	計	現在	今後
N P O	41.4%	14.6%	26.8%
子ども会	<u>52.4%</u>	<u>23.8%</u>	28.6%
青少年指導員、青少年団体	13.4%	6.7%	6.7%
社会福祉協議会	22.7%	9.1%	13.6%
放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点	40.7%	18.5%	22.2%
児童館	40.0%	3.6%	<u>36.4%</u>
行政	36.9%	15.8%	21.1%
保育所、幼稚園、幼児教室	32.9%	13.2%	19.7%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	<u>55.5%</u>	<u>22.2%</u>	<u>33.3%</u>

#### <ヒアリングから>

[ 現在、意識して実践している例 ]

片瀬地区子ども会連絡会（子ども会）

公民館の全館を使用し、子ども会の子どもたちはもちろん、その友達や中学生、先生方、保護者、近隣住民を含め、1,000人近くが集まる大規模なイベント「子ども天国」。

イベントで実施する催し物（ゲーム、工作、模擬店など）は、小学校3年生～6年生を中心に50人ほどの子どもスタッフが企画から参加し、中学生20人ほどが当日参加し、大人は子どものアイデアの実現を支援する黒子となる。

大人スタッフは、子ども会役員だけではなく、青少年指導員や公民館職員など三者共催として、総勢80人ほどになり、子どもたちの活動を支える。

大人スタッフはもちろん、当日参加の親にとっても、地域の大人同士の交流機会となっている。

[ 今後、実践で活かしていく例 ]

旭町こども文化センター（児童館）

この児童館は、平日は乳幼児の親子を対象に子育て支援事業を実施しているが、土曜日・日曜日も開館しているので、父親を含む家族で利用できるという特徴を持つ。

そこに、市の教育文化会館で行われている子育て講座を受講した父親が、その後、受講内容を生かして活動できる場がないという課題があり、「パパくらぶ」が誕生することとなった。

始まったばかりの活動なので、現在のところ子育て講座の受講者を中心に数組の家族が参加している状況であるが、今後は、センターを利用する小学生の母親を通じて参加者を増やし、より多くの大人が地域の子どもと関わりを持つような地域にしていこうと努めている。

## 親子が主役になって楽しむことができる

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点」が 88.9%、「行政」が 84.2%となっている。現在、意識しているのは、「行政」が 73.7%、「保育所、幼稚園、幼児教室」が、61.8%、今後、大切にしたいと考えているのは、「児童館」が 40.0%、「NPO」が 36.6%となっている。

区分	計	現在	今後
NPO	82.9%	46.3%	<u>36.6%</u>
子ども会	57.1%	38.1%	19.0%
青少年指導員、青少年団体	56.6%	33.3%	23.3%
社会福祉協議会	72.7%	50.0%	22.7%
放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点	<u>88.9%</u>	59.3%	29.6%
児童館	69.1%	29.1%	<u>40.0%</u>
行政	<u>84.2%</u>	<u>73.7%</u>	10.5%
保育所、幼稚園、幼児教室	77.6%	<u>61.8%</u>	15.8%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	55.5%	33.3%	22.2%

### <ヒアリングから>

[ 現在、意識して実践している例 ]

小田原市社会福祉協議会（社会福祉協議会）

障がい児余暇活動支援事業として、音楽教室、体操教室、料理教室からなる「遊びのひろば」を実施している。

講師は地元の音楽教室の先生などで、福祉の専門家ではないが、参加する子どもたちが障がいに関わり無く自由に楽しめるよう、手作りの道具を用意したり、視覚的に分かりやすくするなど工夫を凝らしている。

参加する親側の心情を考え、例えば絵画教室などであると上手い下手の比較になりがちで、他の子どもより下手だと思ってしまうと楽しくなくなってしまう。その点、皆で楽器を鳴らす音楽などは、親も子どもそれぞれが自由に楽しむことができる。

いずれの教室もそうした配慮の上で運営されており、参加を楽しみにする親子の間では、会話がはずむ話題の一つになっている。

[ 今後、実践で活かしていく例 ]

旭町こども文化センター（児童館）

「パパくらぶ」では、企画から親が参加する。企画会議では、父親たちが、親子でどのようなことをやってみたいか意見を出す。実現したものとしては、バームクーヘンづくり、竹ぼっくりづくり、肉まんづくりなど。「次は、釜焼きピザが作りたい」などと大胆なアイデアも出てきている。

センターのスタッフは、道具や場所の問題など現実的な課題をクリアして、アイデアを実現できるよう支援に回る。

スタッフは、父親たちの意欲がつながるよう、自ら活動に必要なことを調べてきてもらうなど、主体的に参加できるよう気配りしながら取り組んでいるが、そうした配慮ができるための下地として、皆でプログラムの狙いを共有しておくことが大事なポイントとなる。

気軽に（負担に感じずに）参加することができる

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「青少年指導員、青少年団体」が90.0%、「行政」が89.4%となっている。現在、意識しているのは、「行政」が78.9%、「青少年指導員、青少年団体」が63.3%、今後、大切にしたいと考えているのは、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が77.8%、「児童館」が36.4%となっている。

区分	全体	現在	今後
NPO	75.6%	43.9%	31.7%
子ども会	69.0%	45.2%	23.8%
青少年指導員、青少年団体	<u>90.0%</u>	<u>63.3%</u>	26.7%
社会福祉協議会	77.3%	50.0%	27.3%
放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点	74.0%	44.4%	29.6%
児童館	87.3%	50.9%	<u>36.4%</u>
行政	<u>89.4%</u>	<u>78.9%</u>	10.5%
保育所、幼稚園、幼児教室	81.6%	57.9%	23.7%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	88.9%	11.1%	<u>77.8%</u>

<ヒアリングから>

[ 現在、意識して実践している例 ]

伊勢原市青少年指導員連絡協議会

（青少年指導員）

毎年夏には「親子で作る昔なつかしい遊び」と題した工作教室を実施し、竹を使って凧や竹とんぼ、キャンドルシェイド等を作成している。工作教室が終わった後には5mの太い竹を2本つなげて、「流しそうめん」を行い、大人も子どもも一緒に楽しんでいる。

自然を活かしたイベントも多く、「マスのつかみ取り」では、泳いでいる魚を川の流れを感じながら手で捕まえ、さばいて食べるといった五感をフルに使うプログラムになっている。

「親子ふれあいナイトウォーク」では、17kmの長い道のりを親子で話をしながら歩き通すので、一緒に同じ時間・同じ場所を共有でき、達成感を味わうことができる。

[ 今後、実践で活かしていく例 ]

渋谷きんりん未来の会（学校地域連携）

大和市との協働による大和市立渋谷中学校の開放事業。2名のスタッフが常駐しており居場所として赤ちゃんからお年寄りまで利用できる。

子どもや保護者向けに「子育てサロン」「リトミック体操」「子ども科学実験教室」「アレンジフラワー」、小・中学生が主になって行なう「武道場での遊び」、季節行事として「書初め」「正月飾り作り」、「七夕」「クリスマス」などのディスプレイなど多彩なプログラムがある。

中には利用者が集まらなくて無くなる企画もあり、主催者側のニーズと利用者のニーズの違いを把握し、地域の力（人材）を発掘し、活動に関わってもらうこと、地域の人々がどの事業にも気軽に参加し、交流が図れるよう企画することにチャレンジしている。

## 参加者同士の対話やふれ合いを重視している

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「社会福祉協議会」が95.4%、「行政」が94.7%となっている。現在、意識しているのは、「行政」が84.2%、「社会福祉協議会」が63.6%、今後、大切にしたいと考えているのは、「NPO」が41.5%、「放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点」が37.0%となっている。

区分	全体	現在	今後
NPO	83.0%	41.5%	<u>41.5%</u>
子ども会	73.8%	50.0%	23.8%
青少年指導員、青少年団体	70.0%	36.7%	33.3%
社会福祉協議会	<u>95.4%</u>	<u>63.6%</u>	31.8%
放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点	88.9%	51.9%	<u>37.0%</u>
児童館	83.6%	50.9%	32.7%
行政	<u>94.7%</u>	<u>84.2%</u>	10.5%
保育所、幼稚園、幼児教室	81.6%	60.5%	21.1%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	66.6%	33.3%	33.3%
全体	82.0%	53.0%	29.0%

### <ヒアリング>

[ 現在、意識して実践している例 ]

中央林間小学校おやじ達の会（NPO）

中央林間小学校の在校生・卒業生の保護者からなるおやじ達の会では、1月の「どんど焼き」、5月の「親子スポーツ大会」、8月の「デイキャンプ」、10月の「中林フェスタ」など、季節にあわせた活動のほか、学校周辺清掃、草むしりなどを行っている。

学校の校庭で行なわれる『どんど焼き』は「伝統行事を子ども達の代にもしっかり伝えていくことも大人の役割」との考えから7年前から実施している。準備段階から地域の多くの人たちの協力があり、当日は近隣からも多くの参加者がある。『どんど焼き』のまゆ玉(団子)作りは、“丸める”、“蒸す”などPTAのお母さんの力を借り、子どもたちがその団子を枝にさす。どんど焼きの残り火でその団子を焼き、みんなで食べ、みんなで一年の健康を願う。

[ 今後実践で活かしていく例 ]

中央林間小学校おやじ達の会（NPO）

毎月1回の定例会では、懇親会もされており、おやじ達の横のつながりを大事にしている。

イベントへの参加者が固定している事、親が参加しなくて子どもが参加できないなどが課題であり、多くの子どもの参加してもらうため、親子限定ではなく他の親が責任をもって見てくれるなら参加できるというようにすることを考えている。高学年の児童は親と一緒に参加をいやがるため、子どもだけで参加できる高学年向けのプログラムも考えている。

中央林間小学校は児童の地域が3～4自治会にわたるため、各自治会の横のつながりをもてるように、イベントに多くの参加をしてもらえるようにしたいと考えているとのこと。

地域住民と専門的な知識や経験を持った人材をつなぐ役割を地域の人が担い、3人以上で企画している

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が55.5%、「NPO」が34.2%となっている。現在、意識しているのは、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が22.2%、「行政」が21.1%、今後、大切にしたいと考えているのは、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が33.3%、「放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点」が22.2%となっている。

区分	全体	現在	今後
NPO	34.2%	17.1%	17.1%
子ども会	23.8%	16.7%	7.1%
青少年指導員、青少年団体	26.7%	10.0%	16.7%
社会福祉協議会	27.3%	18.2%	9.1%
放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点	25.9%	3.7%	22.2%
児童館	32.7%	12.7%	20.0%
行政	26.4%	21.1%	5.3%
保育所、幼稚園、幼児教室	14.5%	5.3%	9.2%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	55.5%	22.2%	33.3%

#### <ヒアリング>

[ 現在、意識して実践している例 ]

円蔵小学校（小学校）

小学校区で地域の人々や青少年に関わる団体が活動している青少年育成推進協議会。円蔵小学校区の「子ども大会」は、円蔵小学校、円蔵中学校、神奈川県立鶴嶺高校の3校をつなぐ一大イベント。毎年9月の土曜日に円蔵小学校体育館で開催され、300～500人くらいの人が集まる。

青少年育成推進協議会のメンバーには、自治会・民生児童委員・子ども会・老人会・婦人会等の地域で活動されている方々や、小中高の職員、PTAをはじめとした保護者の方々が参加しており、企画運営をはじめ、当日のイベントに参加した保護者も含めた交流の場が広がっている。

[ 今後、実践で活かしていく例 ]

開成小学校（コミュニティ・スクール）

開成町立の小学校は、全て、保護者や地域住民等が学校運営に係わる「学校運営協議会」を設置するコミュニティ・スクールの指定を受けている。

保護者や地域住民等が学校運営に係わる取組みとして、学校の様々な活動の中で必要となる人材を地域から提供してもらう「学校ボランティア」を実施している。

現在、ボランティアのマネジメントは学校が一手に担っていることから、学校ボランティアを発展・充実させていくために、学校や地域を熟知しており、かつボランティア・コーディネートのノウハウを持った人材が学校ボランティアの運営に専念できる体制が、理想とするところである。

## 参加者の工夫・発想を大事にしている

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「NPO」が43.9%、「子ども会」が40.5%となっている。現在、意識しているのは、「NPO」が31.7%、「行政」が15.8%、今後、大切にしたいと考えているのは、「放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点」が29.6%、「子ども会」が26.2%となっている。

区分	全体	現在	今後
NPO	43.9%	31.7%	12.2%
子ども会	40.5%	14.3%	26.2%
青少年指導員、青少年団体	20.0%	10.0%	10.0%
社会福祉協議会	13.6%	0.0%	13.6%
放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点	37.0%	7.4%	29.6%
児童館	29.1%	5.5%	23.6%
行政	21.1%	15.8%	5.3%
保育所、幼稚園、幼児教室	34.2%	14.5%	19.7%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	11.1%	11.1%	0.0%

### <ヒアリング>

#### [ 現在、意識して実践している例 ]

横浜にプレイパークを創ろうネットワーク  
(NPO)

プレイパークとは、市の公園を活用し、子どもたちが思いっきり遊べるように、極力禁止事項をなくし、自分の責任で自由に遊ぶことを大切にしたい、NPOと横浜市役所の協働による取り組み。

プレイパークで子どもたちは、公園内の地形や樹木を利用して、泥遊び、ロープブランコ、焚き火、工作、スライダー、落ち葉プールなど、様々な遊びを自由に展開することができる。プレイリーダーと呼ばれるスタッフが常駐することで、子どもと一緒に考えて、おもしろがり、子どもの発想を大切にしながら自由な遊びを広げていき、日常なかなかできなくなった遊びを通じて、子どもが自主性や冒険心を育むことをねらいとしている。

#### [ 今後、実践で活かしていく例 ]

つどいの広場どれみ(子育て支援拠点)  
主に地域の乳幼児(0歳~3歳児)を持つ親子を対象にしたつどいの広場「どれみ」では、親と子が一緒になって「季節の製作」(鯉のぼり、七夕飾りなど)に取り組む。スタッフは、見本やパーツを用意する程度で、親子が、自由な発想でできるように組み立てや飾り付けを行なう。

年に2回開催する「手づくりおやつ教室」は、同法人保育所の栄養士が下ごしらえまでの準備をし、参加する親子が材料をこねたりまるめたりして仕上げる人気のプログラム。親子で好きなように取り組んでもらいたいところであるが、食材や調理器具を扱うので、運営側として、安全面や衛生面に気を遣わなくてはならない。

参加者からアンケートを取り、どのようなことがやりたいかなどの意見を聞き、次の企画に活かそうとしている。

## 地域行事や学校など身近な機会や場を活用している

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「子ども会」が69.1%、「青少年指導員、青少年団体」が46.7%となっている。現在、意識しているのは、「子ども会」が31.0%、「青少年指導員、青少年団体」が26.7%、今後、大切にしたいと考えているのは、「子ども会」が38.1%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が22.2%となっている。

区分	全体	現在	今後
NPO	39.1%	17.1%	22.0%
子ども会	<u>69.1%</u>	<u>31.0%</u>	<u>38.1%</u>
青少年指導員、青少年団体	<u>46.7%</u>	<u>26.7%</u>	20.0%
社会福祉協議会	22.7%	13.6%	9.1%
放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点	44.4%	25.9%	18.5%
児童館	16.3%	3.6%	12.7%
行政	42.1%	26.3%	15.8%
保育所、幼稚園、幼児教室	34.2%	18.4%	15.8%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	44.4%	22.2%	<u>22.2%</u>

### <ヒアリング>

#### [ 現在、意識して実践している例 ]

##### 片瀬地区子ども会連絡会（子ども会）

片瀬地区子ども会連絡会は、連絡会を構成する個々の子ども会単独では困難な事項に対して支援を行い、地域防災イベントやお祭りなどの地域行事に参加している。こうした身近さが、市域の子ども会連絡協議会より規模の小さい片瀬地区子ども会連絡会の強みである。

また、日ごろから、学校施設を借りて活動したり、地域パトロール、保護者講演会など地域行事に参加しながら、身近な機会や場を活用しているほか、子ども会、青少年指導員、主任児童委員、小、中PTA、地域ブロック代表などによって構成される「片瀬地区青少年育成協力会」の一員として、様々な団体と青少年に関する意見交換・情報交換をすることを通じ、地域との協力関係が構築できている。

#### [ 今後、実践で活かしていく例 ]

##### 片瀬地区子ども会連絡会（子ども会）

子ども会への子どもの加入が減るなかで、親の参加が得られにくく、連絡会を構成する個々の子ども会の役員の負担を、どのようにして軽減するかが課題となっている。

例年6月に開催する「子ども天国」では、4月に子どもスタッフを募集し、5月から6月にかけて打合せを少なくとも3回は実施。子どもたちが日程を合わせて集まることは、大人以上に難しい。

こうした背景から、「子ども天国」の実施に当たっては、これまで個々の子ども会の役員（大人）が担っていた子どもスタッフの募集を、地元の公民館の協力を得て、地域全体の子どもたちにも募集をかけて子ども会と交流しながら、イベントの趣旨を損ねず、役員の負担を軽減する工夫を施すなど、より参加しやすい環境づくりに努めている。

強制はしないで自由に参加できるようにしている

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「行政」が 79.0%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 77.8%となっている。現在、意識しているのは、「行政」が 63.2%、「保育所、幼稚園、幼児教室」が 42.1%、今後、大切にしたいと考えているのは、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 55.6%、「放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点」が 37.0%となっている。

区分	全体	現在	今後
NPO	63.4%	26.8%	36.6%
子ども会	76.2%	40.5%	35.7%
青少年指導員、青少年団体	60.0%	40.0%	20.0%
社会福祉協議会	63.6%	31.8%	31.8%
放課後子ども教室、放課後児童クラブ、子育て支援拠点	70.3%	33.3%	<u>37.0%</u>
児童館	60.0%	23.6%	36.4%
行政	<u>79.0%</u>	<u>63.2%</u>	15.8%
保育所、幼稚園、幼児教室	59.2%	<u>42.1%</u>	17.1%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	<u>77.8%</u>	22.2%	<u>55.6%</u>

#### <ヒアリング>

[ 現在、意識して実践している例 ]

渋谷きんりん未来の会（学校地域連携）

渋谷中学校開放事業は、地域の学校であり、利用料もほとんどかからない（会議室等の貸出は有料）ことから、地域の親子が気軽に利用している。

子育てサロンは昨年までは入りきれないほどの人気で、乳幼児向けの遊具の貸出もあるため、同じ場所で自然に子どもを遊ばせながら保護者同士が仲良くなって輪ができていく。中学生が主になっている「武道場の遊び」は、学校のボールなどの遊具を使ったり、ハンカチ取りをしたり、小・中学生が入り混じって広い場所を走り回って遊ぶなど単純な遊びに人気がある。

地域のニーズになるべく対応しようとプログラムについてのアンケートをとり、アンケートから「男の料理教室」が開催され、男性の利用者から好評を得ている。

[ 今後、実践で活かしていく例 ]

開成小学校（コミュニティ・スクール）

「学校ボランティア」は、保護者からの希望を募って参加プログラムの割振りを行っている。息長く活動を続けてもらえるよう、一人のボランティアが背負い込んで何かを犠牲にするような無理がないよう、心がけている。

保護者がボランティアとして学校にくることで、児童にとっては、普段の家庭とは異なる活躍をする親の姿を見ることが出来る機会になり、また、学校の先生にとっても、児童の保護者という一つの視点からではない見方が加わる機会にもなっている。

今後は、保護者だけでなく、地域の方々の学校ボランティアへの参加をお願いしていく方向で考えている。

地域の力（人と人をつなげる力や学校等を支える力など）を借りている

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が 46.0%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 33.3%となっている。現在、意識しているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が 19.7%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 22.2%、今後、大切にしたいと考えているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が 26.3%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 11.1%となっている。

区分	全体	現在	今後
保育所、幼稚園、幼児教室	46.0%	19.7%	26.3%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	33.3%	22.2%	11.1%

保育所、幼稚園、小学校のみ回答

<ヒアリング>

[ 現在、意識して実践している例 ]

円蔵小学校（小学校）

円蔵小学校で開催される「子ども大会」は、隣接する円蔵中学校吹奏楽部、鶴嶺高校吹奏楽部の生徒には地域への発表の場になっており、練習の励みにもなっている。

円蔵祭囃子保存会による力強い和楽器の演奏では、子どもたちもハッピー姿と一緒に演奏し、地域に根付いている「祭り囃子」に子どもたちはふれあうことができる。

地域ボランティアによるマジックショーに小学校の先生が加わったりと、わき合い合いとした雰囲気。ダンスパフォーマンスでは、子どもたちも音楽に合わせて一緒にダンスを踊る。土曜日の午後ということもあり気軽に子どもたちも地域の人たちも参加している。

小学生、中学生、高校生、小学生の保護者、地域の人と一緒に集まる「おまつり」で音楽、ゲーム、昔遊びなどを通して同じ時間、同じ場所を共有することで自然に世代間交流ができています。

[ 今後、実践で活かしていく例 ]

仙石原幼児学園（認定こども園）

色々と実施しているプログラムの中には、育児参加や子ども理解を促すよう、男性家族の参加を意識した「メンズデー」がある。体操、ゲーム、工作など、楽しんでもらえるものや父親が特技を披露するような内容としている。回数を重ねるうち、参加も増えてきている。参加者へのアンケートでは、企画アイデアも出てきており、一緒にできないか考えているところ。

若い親は子どもとの関わり方が分からず、うまく接することができないようなことがあるため、単なる参観ではなく、親子が主役になって楽しみ、体験を共有できるプログラムにしている。

また、地域との交流としては、近所の高齢者福祉施設との長い付き合いがある。園児が誕生会に参加して歌や踊りを披露したり、会食したりという交流が続いている。

園は、「地域の核」となってコミュニティの場となることを理想としており、こうした様々な取組みの一層の充実を図っている。

## 子どもの魅力を親に伝えることを意識している

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が61.9%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が11.1%となっている。現在、意識しているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が39.5%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が11.1%、今後、大切にしたいと考えているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が22.4%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が0.0%となっている。

区分	全体	現在	今後
保育所、幼稚園、幼児教室	61.9%	39.5%	22.4%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	11.1%	11.1%	0.0%

保育所、幼稚園、小学校のみ回答

### <ヒアリング>

[ 現在、意識して実践している例 ]

地域家族しんちゃんハウス（NPO）

「今の親は、赤ちゃんの言葉を傾聴するという感覚がない」という問題意識から、親と子のコミュニケーションをカラダとココロで感じる機会を提供する「Baby's ROOM」の講座を実施している。

今の親は、赤ちゃんが言葉を発しないから、自分の胸がつかまってしまって、「こんなに面倒を見ているのに何で泣くの」、「離乳食を一生懸命つくっているのに何で食べないの」と、自分の心が癒されていないから、すぐにムカッとなってしまふのだという。

例えば、子守歌を歌ってあげるのもいいし、絵本を読んであげるのもいい。あやしながら、「よしよし」と、親が言葉を発することで、赤ちゃんとの会話が生まれ、『赤ちゃんの気持ちと共有する』という感覚に、親自体の心がリフレッシュするのだという。

赤ちゃんが、「ブー」とか、「ウー」とか、言ったら、それは言葉であり、そのトーンやニュアンスによって、すべてが異なっている。子どもをあやしながら、親が言葉かけることで、子どもに対する愛着を感じられる機会を提供している。

[ 今後、実践で活かしていく例 ]

葉山風の子（保育所）

子育てを始めると、満たされない思いや、不安な思いが出てくる。それを、親自身が気づかずにいることが多い。

また、こんなことを言っただけではいけないとか、こんなことを感じてしまう自分はダメな親だと思い込んでしまう。

そういう親の不安な気持ちや、子どもに対して、「私はこんなにやっているのに、何で、私の子どもはこんなこともできないの」という、子どもに対するストレスへと変わってしまう。

そういう「言葉にできないような思い」を、どんどん出せるような場所が必要。そういう思いを吐き出すことで、固くなって閉じてしまった心も柔らかくなる。本当に安心して過ごせる「場づくり」を目指していく。

## 地域に参加する楽しさや面白さを育てることを意識している

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が 34.2%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 44.4%となっている。現在、意識しているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が 9.2%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 0.0%、今後、大切にしたいと考えているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が 25.0%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 44.4%となっている。

区分	全体	現在	今後
保育所、幼稚園、幼児教室	34.2%	9.2%	25.0%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	44.4%	0.0%	44.4%

保育所、幼稚園、小学校のみ回答

### <ヒアリング>

[ 現在、意識して実践している例 ]

ワーカーズ・コレクティブキャンディ  
(保育所)

年1回キャンディ主催の「子どもまつり」が開催され、地域の大人と子どもがふれあい、楽しい時間を過ごす。工作、地元の高校生のダンスパフォーマンスなど地域の知識・経験を持った人材の力を借りて、400人程集まる盛況なおまつりである。お父さん向けにピアガーデンなどもある。“何か楽しそうなことをやっている”と近所の人たちが遊びに来る。

保育園を使わない日には、資格、技術をもった地域の方に無料で場所を提供し、ベビーマッサージ、おもちゃ修理などが行なわれている。地域にはいろいろな技術をもった人たちがいるが、それを子どもたちに教えるための接点をどのようにしたらよいかわからないという。保育室すきっぷ、すきっぷドレミ園では、それをつなぐコーディネーターの役割もしている。

[ 今後、実践で活かしていく例 ]

ワーカーズ・コレクティブキャンディ  
(保育所)

キャンディが運営する2つの保育園では、地域、親子のふれあいの場「ひろば」を開催しているが、毎日、保育園で散歩に行く公園で「ひろば」のチラシをお母さんたちに渡し、“今日も一日しゃべらなかった”、“誰にも助けられなかった”など孤立感を感じている親の力になれるようにフェイス to フェイスで情報提供をする。理事長いわく「要するにおせっかいなのよね」と。

保育園では、親だけでは対応しきれない小さな“困った”のいろいろなニーズに対して、地域のボランティアとの橋渡しができて、解決機能のある“子育て支援の拠点の家”を作ろうという計画がある。週何回か活動できる世代の力を地域に広げていきたいとも考えている。地域の親の“困った”に向き合い、必要な仕組みづくりを目指している。

親同士をつなげる機会を増やし地域を再生(学校等を支える地域を活性化)させることを意識している

現在と今後を合わせ、この視点を意識して活動しているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が 42.1%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 33.3%となっている。現在、意識しているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が 18.4%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 11.1%、今後、大切にしたいと考えているのは、「保育所、幼稚園、幼児教室」が 23.7%、「小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携」が 22.2%となっている。

区分	全体	現在	今後
保育所、幼稚園、幼児教室	42.1%	18.4%	23.7%
小学校、コミュニティ・スクール、学校地域連携	33.3%	11.1%	22.2%

保育所、幼稚園、小学校のみ回答

#### <ヒアリング>

[ 現在、意識して実践している例 ]

ワーカーズ・コレクティブキャンディ  
(保育所)

月2回の「親子のふれあい広場」では、子どもたちをみんなで見守りながら、暑い日は子どもたちはプールに入ったり、絵本の読み聞かせや手遊びなどをして、ゆっくり時間が過ぎる中で、お母さん方の会話がはずむ。子育てアドバイザーの資格を持つなど経験豊富な保育士たちがお母さんたちの悩みを聞いている。

地域の親子も対象とした参加型のイベント「ふれあいディ」は、お父さんお母さんが主になっての冬はうどん作り、餅つき、夏はそうめん流しなど、お父さんの参加も多い楽しいイベントになっている。

人と人が出会って、来て良かったと思ってもらえること。その場において楽しんでいる姿をみることが、スタッフの喜びでもあるとのこと。

[ 今後、実践で活かしていく例 ]

仙石原幼児学園(認定こども園)

親子が一緒に取り組めるたくさんのプログラムがあり、それぞれ担当の職員を決めて企画・運営している。なかには、ボランティアの参加があったり、保護者会が中心になるものもある。

「納涼大会」は、地域の夏祭りのような催しで、近隣の高齢者福祉施設や小学校との交流の場ともなっていて、住民が毎年楽しみにしている。

踊りや陶芸などの専門家が子どもに教えてくれるなどの地域交流もある。地域には、もっと多様な人材があるはずなので、これまでとは異なる専門分野の人材を確保するのが課題。

ただし、単に文字を並べた情報からでは人物像が分からないことから、生きた情報を得るため、色々なところに出向いて人脈をつくったりしている。

## 2 モデル事業

### (1) 委託内容

実施期間（委託期間）：平成 25 年 5 月 22 日～10 月 30 日

委託事業者：NPO 法人教育支援協会

### (2) モデル事業の実施結果

子どもたちが地域の大人（放課後児童クラブ指導員、町内会、NPO など）や大学生などと一緒に、地域の親子が参加できるお祭りを企画・運営した。

実行委員会によるイベント実施に向けた打合せ（5 月～7 月）

< 実行委員会参加者 >

蒔田公園愛護会役員、蒔田公園近隣の小学校の放課後キッズクラブ・学童クラブ等の指導員など

子どもワークショップ（7 月 22 日（月）、8 月 26 日（月））

どのようなお祭りにしたいかなどのフリーディスカッション

< 対象者 >

蒔田公園近隣小学校の放課後キッズクラブ・学童クラブ等の子どもたち 30 名程度  
出店者・協力者説明会（9 月）

< 実施協力者 >

蒔田公園近隣町内会、青少年指導員、NPO、学生ボランティアなど  
イベント実施『蒔田公園で遊ぼう！ One Day キッズパーク』

日 時：9 月 28 日（土） 13 時～16 時

場 所：蒔田公園（横浜市南区）

内 容：屋台、ゲーム、ものづくり体験など

来場者：約 1,000 人

検証（10 月）

企画運営に参加した子どもや大人へのヒアリングまたはアンケート  
報告書の作成（11 月）

### (3) モデル事業での検証

親が企画や運営に参加し、地域の大人と交流できる

子どもには自発的活動を、親にはそのサポートという役割を持たせて参加してもらったことで、親子が同じ立場で参加するイベントとは異なる、参加者同士の横の連帯感が生まれ、親にも達成感を味わってもらうことができた。

事前準備には子ども会からの声掛けでテント設営やお店の設営など、父親たちが参加してくれた。しかし当日来場した父親を巻き込むような仕掛けがなく、そうした仕掛けを行うネットワークを作るためには、母体となるような組織や団体が継続的に努力していく必要があると考えられる。

イベントがあるため普段より多くの人々が公園に集まった。イベントに参加するために来た人以外にもベンチで座ったり、道でおしゃべりが始まったりと副次的な効果を生み出していた。

更に、同日、公園の別の場所で老人会主催のイベントなどができれば、高齢者が活躍できる場の創出ができ、一層の広がりが持てたかもしれない。

#### 親子が主役になって楽しめる

モデル事業を通して、小学校1年生からでも企画運営ができることがわかった。

小学校低学年より上の年齢の子どもの場合、その支援には、親が口を出して家庭と同じ状況を作るのではなく、大学生のようなお兄さん、お姉さんのほうが適任である。その上で、親も子どももそれぞれが主役になれる工夫があるとよい。

「クレームを言う人/言われる人」という関係を少なくするには、運営する側に多くの人を引っ張り込むことが必要である。

#### 気軽に（負担に感じずに）参加できる

負担感を少なくするためには、参加形態が重層的にあると良いことが分かった。例えば、子どもは、企画・準備から当日の運営に関わった者だけではなく、途中から仲間に加わった者、当日遊びに来たついでに仕事をした者などがいた。大人は、実行委員会に加わり全ての企画準備をした団体、企画会議に参加して協力してくれた団体、既存の企画で模擬店に参加した団体、設営や片付けを手伝ってくれた団体や個人などの形があった。

さらに、当日参加した人がお茶を飲みながら情報交換できる喫茶室のような場所があれば、新しいつながりができた可能性が考えられる。

今回のようなイベントを開催することで、日頃あまり人が多くない公園に人が集まったことから、ちょっとした仕掛けで世代間交流の機会が創出できると感じられた。

#### 参加者同士の対話やふれ合いを重視する

親が子どもに指示を出すような場面は少なくするよう注意する必要がある。特に、小学生以上の場合、親子と一緒に動くような活動については、弊害が生じる。

親にも役割を与えることで、親同士の交流や自分の子ども以外の子どもとの交流も持てるような企画となる。親と子が一緒に参加するイベントでは、親子でかたまり、横のつながりを作るまでには至らないが、今回のように子どもと大人の役割が分かれている場合には、横のつながりを作り出すことができる。

参加者同士の対話やふれ合いを進める際に介在する第三者として、放課後キッズクラブや学童保育等の職員は適任であった。

大学と連携を取って多くの学生がボランティアとして参加した。学生には子どもたちと直接関わる貴重な体験となり、子どもたちもお兄さんお姉さんとの関わりが楽しく、大人たちにとっても若い人の参加が心強く感じられた。

地域住民と専門的な知識や経験を持った人材をつなぐ役割を地域の人が担い、3人以上で企画する

地域にリーダーはいるが、そのリーダーたちをまとめるコーディネートができていないのが現状だと思われる。

コーディネーター<sup>\*1</sup>の育成や、安定して業務にあたるような対価や立場の保障などが課題である。

このポイントにおいて、ワークショップ形式の会議方法が適している。

今回は、事務局が参加者の負担感を減らすためにバックでサポートしながら、全体の流れを把握したが、このような全体の調整を責任をもって引き受ける団体や組織が必要である。

町内会長など地域のリーダーにどのように理解してもらうかが課題である。

地域の子どものためにという目的を明確にすることで、地域の協力が多く得られた。まずは、「安全安心に暮らせるまちづくり」が大事だと感じる団体や個人を増やしていくことが重要である。

#### 参加者の工夫・発想を大事にする

地域における子どもの活動は、“お客様”になることが多く、主体的に地域活動に関わることは少ない。子どもワークショップの結果から、子どもたちはより主体的に関わることを望んでいることが分かった。主体的に関わる機会が少ない地域活動は、子どもにとって新たなチャレンジの場になる準備ができていないのが現状のようである。

今回、関わった学生や大人たちは皆、子どもたちが深く真剣に取り組む姿に驚いていた。子どもたちの持っている潜在能力を引き出す環境を整え、同時にその力を大人が認める場所が重要であることが検証できた。

今回のイベントは企画、運営に子どもたちが主体的に参加できるような「だがしや楽校」<sup>\*2</sup>の方式を取り入れたことから、関わった学生や大人たちが皆びっくりするほど子どもたちが頑張っていた。

---

\*1 コーディネーター

ここでは地域活動において、住民と専門的な知識や経験を持った人材とをつなぐための調整をおこなう人や組織を指す。

\*2 「だがしや楽校」

松田道雄氏（東北芸術工科大学美術科総合美術コース教授）が、かつて子どもたちの外遊びの拠点であり、子どもの社会教育の場にもなっていた駄菓子屋にヒントを得て発案。お祭り屋台の形式で、だれもが手軽に「趣味・特技・遊び・作品」などを「みせ」合うつどい。学校ではなかなか学びづらい「創意工夫・世代交流・共同体験」を学ぶ。

地域行事や学校など、身近な機会や場を活用する

モデル事業に参加した日枝小学校では、総合的学習の時間であるクラスが地域活動に定期的に参加する授業を行っていて、校長によると、この地域では、地域が学校を助ける風土があるとのことである。

しかし、一般的には、地域で活動している団体は学校との連携を取ることは難しく、学校は、地域の人が提案したり企画を持ち込むような場所ではないようである。地域から学校に対してどのようにアプローチしていくかが課題となっている。

学校の中に地域力を活かすとともに、学校が地域に出て行く活動も今後は重要である。

また、今回のように、異年齢や学校が違う人々との交流など、学校外の活動の良さもある。

もともと関係性があった団体と小学校の一つの学級がコラボレーションして模擬店を出店することとなり、担任の先生を軸に、学級の児童、親が中心となって企画運営する場面ができた。

違う学校の子どもたちでグループワークを行ったことで、近隣小学校の児童同士の交流も図れた。

強制はしないで自由に参加できるようにする

親が企画・準備から一緒に行くことはハードルが高いことから、徐々に関係性を深めていくことが重要であると考え。特に、父親が参加するような仕掛けを行うネットワークを作るためには、母体となるような組織や団体が継続的に努力していく必要があるようである。

子どもにも大人にも、参加形態にいろいろな層を作ることができたが、こうしたことが負担感を少なくすることがわかった。

子どもがこのイベントに興味を持ち家庭で話す様子から、親がイベントに興味を持ち、親子で対話をするにつながり、親のバックアップを得たり、結果として親子で参加することが可能になった。

#### (4) モデル事業の総括 ～子どもを中心につながる地域と親子～

「親子のコミュニケーション」

どのような参加方法でも、気楽に楽しく参加できるこのような地域イベントは、家庭の中だけで完結しがちな家族関係に風穴をあけるきっかけとなった。子どもが責任を持って自主的な活動に従事し、親も子どもの考えたことの実現を支援するなどの役割をもって活動に参加することは、家庭内での親と子の会話を促し、かつ対等な関係を醸成することにつながる。

### 「子どもの自主的参画」

事前に2回子どもたちのワークショップを実施し、放課後キッズクラブ・学童クラブ等の指導員がフォローをするなかで、子どもたちが自ら企画を考案した。ファシリテーター役の大人は、子どもたちの自主性を重んじることができるよう、嶋村委員が作成したファシリテーターの心得をもとに簡単な事前研修を受けたうえで、子どもたちの手で実現できるようにサポートした。結果としては、子どもたちにとっては、自信をつけ、満足度の高い経験になった。

また、事前から関わる、途中から参加する、当日来てボランティア体験をする、遊びにだけ来るなど、子どもたちの参加方法がいくつもあり、その子の事情に合わせて満足がいくような仕掛けを作ることができた。

### 「複数の地域人材で取り組む」

事前にどのように初回の会議をデザインするかの打ち合わせを綿密にした。そして、複数の地域人材に声掛けをして、最初に集まってもらった時にモデル事業の趣旨を説明し、その上で嶋村委員のファシリテートでワークショップを行った。そのワークショップを通じ、コアメンバーの実行委員の間で今回のモデル事業が目標とするものを共有することができた。

この最初の共有が最後まで実行委員の気持ちをひとつにし、同じ思いでひとつのイベントを作り上げることができたと考えられる。

### 「多くの地域人材や団体の協力を得る」

コアメンバーになった実行委員のほかには、事業の趣旨や流れを理解してもらえよう協力者から、当日のお店を出してくれる協力者や団体、また、備品を提供してくれる団体、当日の設営のみ協力してくれる人など、全員に一律の関わりを強制せずに、それぞれができる範囲での参加協力をお願いした。

コアメンバーによる実行委員を立ち上げたあと徐々に協力団体を増やしたり、会議の中でそれぞれの役割を確認することにより、1人あたりの負担が大きくなり無理がかかることがないよう心がけた。

### 「参加しない人を巻き込む」

最初から無理に巻き込むのではなく、楽しいと思えて、次も参加したいと思えるようにすることが、次につながる工夫だと思われる。さらに当日遊びに来た人に役割を与えてお手伝いをしてもらえるような仕掛けがあると良い。

親世代には、子どもたちの自発的活動のサポート役で参加したことで、わが子と同じ立場で参加するイベントなどでは持ち得ないような連帯感や達成感を味わってもらうことができ、負担感がなく充実感が多かったように思われる。

「その地域にあった無理のない企画」

最初からやるべきことを決めずに、実行委員の中から出てくるアイデアに沿いながら企画を作っていた。無理なところは実施しなかったために、親を巻き込むところまではできなかったが、実施するメンバーに負担感がないように注意をした。

「事務局の立場」

事務局の仕事としては、委員会の設置、資料の作成、会議の取りまとめ等で、中身については、実行委員を中心に動いてもらうことを優先した。地域の人にはできないこと、やりにくいこと、面倒だと思うことはこちらで引き受けるようにした。地域に関係のない第三者が事務局をつとめることで、スムーズに進めることができた。

### 3 検証結果

～地域活動を通じて親子が関わりを深めていくために～

#### (1) アンケート調査の結果から

以下では、地域活動実践者及び学校等関係者に対して実施したアンケート調査の結果を振り返りながら、地域活動を通じて親子が関わりを深めていくポイントについて検証することとする。

##### 遊びを大切にした地域活動の実践

「親子が主役になって楽しむことができる」、「気軽に（負担に感じずに）参加することができる」、「参加者同士の対話やふれ合いを重視している」、「強制はしないで自由に参加できるようにしている」といったポイントについては、既に意識して地域活動を実践しているという結果となった。

ヒアリング結果からは、「遊び」を大切にした地域活動が実践されていることが伺えた。

例えば、「子ども天国」、「パパくらぶ」、「遊びのひろば」\*など親子が主役になって楽しむイベントづくりをしているケースや、定例会のあとで懇親の場を設けることで親同士のふれ合いを大切にしているケース、イベントの中に流しそうめんを一緒に食べるという親子が一緒に楽しめるような心配りをしているケースもあった。

- また、学校開放の取り組みでは、武道場で学校のボールや遊具を使ったり、小・中学生が入り混じって走り回るなど、子どもたちが集まるだけで、自然に輪が広がるような単純な遊びに人気があった。

なお、子どもの「遊び」を引き出すプレイリーダーが市の公園に常駐し、子どもたちが思いっきり自由に遊びながら自主性や冒険心を育んでいくことを見守る取り組みも見られた。

##### 地域人材をつないで地域に開かれた活動を仕掛けることへの更なる期待

一方で、「親が企画や運営に参加し、地域の大人と交流することができる」、「地域住民と専門的な知識や経験を持った人材をつなぐ役割を地域の人が担い、3人以上で企画している」、「参加者の工夫・発想を大事にしている」、「地域行事や学校など身近な機会や場を活用している」といったポイントについては、地域活動において比較的意識されていないという結果となった。

---

\*「子ども天国」「パパくらぶ」「遊びのひろば」はヒアリング調査を行った団体のプログラムの名称  
23・24 ページを参照

ただし、ヒアリング結果から、地域活動を企画運営する核となる人材をつなぐ役割を担ったり、活動を地域に開くことを意識しながら、地域活動を実践していることがうかがえた。

例えば、既存の青少年を支えるネットワーク組織が、地域活動に必要な協力関係を構築しているケースや、児童館が子育て講座を受講した父親に対して地域活動を企画実践していくための場をつくっているケースなど、地域活動を進めていく核となる人材をつなぐ取組みが見られた。

あるいは、子どもが企画し大人が実現を支援する場において、子ども会役員、青少年指導員、公民館職員など様々な立場の大人が加わっていくケースや、地域ボランティアの参加をコーディネーターが促進しているケース、参加者にアンケートを行って意見をとり入れながら運営をしているケースなど、それぞれの主体性を尊重しつつ、それぞれに負担できる参加の仕方を用意しながら、地域に開かれた運営への試みが見られた。

なお、中心となるメンバーの負担を軽減するために公民館が一部の役割を担うなどの工夫も見られた。

#### 地域に開くことでつながりを深める学校等関係者

保育所、幼稚園及び小学校のみを対象とした「地域の力（人と人をつなげる力や学校等を支える力など）を借りている」、「子どもの魅力を親に伝えることを意識している」、「地域に参加する楽しさや面白さを育てることを意識している」、「親同士をつなげる機会を増やし地域を再生(学校等を支える地域を活性化)させることを意識している」という4つのポイントについては、それぞれが意識されており、学校等を地域に開くことでつながりが広がりつつあるという結果となった。

例えば、学校を地域に開いたイベントでは、隣接する小学校、中学校、高校の生徒が集まり、親も含め、さらに地域団体やボランティアが参加して交流を深めているケースや、保育所を地域に開いた取組みでは、保育所が地域人材と親子をつなぐ役割を担っているケースなどが見られた。

また、乳幼児期の親子に対しては、保育所などにより、日々の保育や講座等の機会を通して子どもの魅力を伝えていくことを意識した取組みが見られた。

## (2) モデル事業の結果から

以下では、モデル事業「蒔田公園で遊ぼう！One Day キッズパーク」を振り返りながら、地域活動を通じて親子が関わりを深めていくポイントについて検証する。なお、検証の結果については、アンケート調査の結果から見えた、「つなぐ」、「開く」、「遊ぶ」という3つのキーワードからまとめることとする。

#### 遊びを通じた親子のコミュニケーション

モデル事業を通じて、地域活動を通じて親子が関わりを深めていくには、親子それぞれが役割を持ちながら、一緒にやって面白いと思わせるような仕掛けを地域

活動の中に加えていくことが重要であることが確認できた。そのためには、大人に対しては、あらかじめ企てるのではなく、偶発的なことも受け入れ楽しむなど、「遊ぶ」をキーワードとした大人の目線を下げるような活動であること、地域活動の場が親たちの憩いの場となることが、親子の関わりを深め、親の参加の負担感を軽くするために大切であることが確認できた。また、子どもにとっては、自分たちも企画段階から参加でき、子ども同士で関われる活動であることが子どもの主体性を生み、結果として親子を対象とした地域活動が活性化することが確認できた。

新たな発見として、子どもたちは、より主体的に関わることを望んでおり、自分の意見や発想に意味があるということ子どもたちが体感するワークショップの機会など、自主性を重んじた地域活動を求めていることが分かった。また、お兄さん、お姉さん世代との関わりが楽しく感じられることから、ワークショップなどの子ども支援は大学生などが適任であることが分かった。

#### 地域人材をつなぐコーディネーター

モデル事業では、NPO法人教育支援協会と地域の放課後キッズクラブ・学童クラブが連携しながら、複数の地域リーダーに声をかけることで実行委員会を立ち上げた。地域活動に専門的な知識や経験を持ったNPOが事務局として責任を持って雑務的な仕事を引き受け、地域のリーダーの負担を減らすことが地域活動の活性化に結びつくことが確認できた。

また、事務局が設定した実行委員会という場に、さらに専門家という立場でファシリテーターが入ることで、多様な背景を持つ地域のリーダーの間のコミュニケーションを円滑にすることが効果的であることが確認できた。

企画・運営に関わる地域のリーダーには色々な層の人たちをつなげる役割が期待されるが、新たな発見として、そうしたリーダーに自分が何をできるかということに加えて誰を知っているのかということ意識するようなプロセスを含めて運営することが、役割を果たしてもらうことに効果的であることが分かった。

海外では「コミュニティ・ディベロップメント」という言葉があり、専門家が地域に出向いていって、地域のリーダーの合意形成を支援しているという例があり、地域人材をコーディネートする手法として参考になる。

#### 多様な関わり方で地域に開く

モデル事業では、企画の段階から子どもたちが関わり、さらにイベントの協力者として、近隣町内会、子ども会、小学校、NPO、学生ボランティアが加わり、さらに、子どもたちの企画を支援するかたちで親も関わりながら、開かれたイベントとすることで、親子同士だけでなく、地域の大人も巻き込んだ世代間交流の場となることが確認できた。また、それぞれができる範囲で役割を担うことで、参加者にとって負担感のない柔軟な形のイベントとなることも確認できた。さらに、親に役割を与えることで、親が、自分の子どもだけでなく、よその子どもとも関われるようなイベントとなることが確認できた。

また、次のような配慮が、多様な関わりがある地域イベントの実現に効果的であることが確認できた。

- ・「地域の子どもたちのために」という目的を明確にすることで地域の協力が得られたこと。
- ・親世代の参加形態に色々な形があること。
- ・コアメンバーになった実行委員のほかには、事業の趣旨や流れを理解した上での参加、当日の出店、備品の提供、当日の設営など、協力者・団体に一様の関わりを強制せずに、できるところでの協力を依頼すること。
- ・実行委員会を立ち上げたあと、徐々に協力団体を増やしたり、企画会議の中でそれぞれの役割を確認することにより、1人あたりの負担が大きくなりたくないよう心がけること。

新たな発見として、公園でイベントを開催したことで、ふらっと通りかかった近隣住民が何をやっているのだろうと思って立ち寄り、そこで知り合いがいたから立ち話になるなど、学校などの施設で開催するイベントとは違った気安さと開放感が得られることが分かった。

## 第5章 今後に向けて

### 親子の関わりが深まる地域活動～3つのキーワードと6つのポイント～

本報告書は、青少年の健全育成の基盤づくりを、親子と地域とのつながりという視点から考え、青少年を取り巻く環境をより良いものとし、様々な課題を防ぐことにつなげるために、地域活動により親子が得られるものについてまとめることを目的とした。

アンケート調査とモデル事業の検証を通じて、地域活動により親子が得られるものが何であるのか、また、地域活動の実践者が地域と親子とのつながりをどのようにつくっていけばよいのか、さらに、学校関係者に期待される役割は何であるかが、少しずつではあるが見えてきたように思う。

子どもにとっては、地域活動は様々な人との触れ合いから生まれる多様な経験が社会性を育む機会となり、親にとっては、地域活動に子どもと一緒に参加することで、身近な地域において、子育てへの理解者・共感者・協力者が増え、子育てへの不安や負担感を減らす機会となっている姿が見えてきた。

親子にとっては、地域活動への参加を通じてお互いが得られた様々な気づきや楽しい体験を一緒に共有することが、親子の関係を深めている姿が見えてきた。

また、地域活動実践者にとっても、親子が地域活動に楽しく参画できるよう、子どもを中心に地域住民と親子がつながる機会をつくることで、地域コミュニティの活性化につながっているという姿も見えてきた。

さらに、学校等関係者は、子育て不安・負担感を減らすとともに、子どもが多様な学びの機会を得て成長することが大事であることを認識し、親子と地域活動をつなぐ場や機会の提供などに協力している姿が見えてきた。

ここでは、第4章での検証結果を踏まえながら、地域で親子が関係を深めていくために地域活動を推進していく上で大切にしたいことを、3つキーワードと6つのポイントに整理し、今後、地域での実践をさらに推進していくために必要な取組みについて提案することとする。

## 1 キーワード1：「つなぐ」

### (1) ポイント1：地域の人材をつなぐ

地域活動を推進していく上で、地域の人材に対して何ができるかということを目指す以外に、誰を知っているのかということ意識しながら、いろんな層の人たちをつなげる役割を果たせるように環境を整えることで、地域活動の活性化に結びつけていくことが重要である。

地域活動に専門的な知識や経験を持ったNPOが事務局として責任を持って雑務的な仕事を引き受けることで、地域人材の負担を減らすことで良い循環が生まれるという可能性を大事にしたい。

多様な背景を持つ地域人材の間のコミュニケーションを円滑にするために、専門家という立場でファシリテーター\*が入ることは、地域活動を推進していく上で大切にしていきたいポイントである。

### (2) ポイント2：地域の絆を深める

地域活動を推進していく上で、親子向けの地域活動を進めていくことは、「地域の子どものため」という「目的を共有した地域の絆づくり」をしているという考え方が重要である。

地域人材のネットワークを立ち上げたあと、会議の中でそれぞれの役割を確認しつつ、1人あたりの負担が大きくなり無理がかかることがないように、徐々に協力団体を増やしたり、地域の協力を求めていく過程が、地域の絆づくりにつながるという可能性を大事にしたい。

地域リーダー以外に、事業の趣旨や流れを理解してもらえそうな協力者や、地域活動に参加してくれる協力者や団体、また、地域活動に備品を提供してくれる協力者や団体、地域活動当日の設営のみ協力してくれるボランティア、地域活動の現場に立ち寄ってお茶を飲みながら情報交換する地域住民など、全員に一樣の関わりを強制せずに、できるところでの参加の形態を用意することで、地域の絆を広げていくことは、地域活動を推進していく上で大切にしていきたいポイントである。

地域での実践をさらに推進していくための提案～地域をつなぐために～

地域のネットワーキングを裏で支えるお世話系の事務局機能を育てていこう！

地域のコミュニケーションを円滑にするファシリテーター\*を育てていこう！

\*ファシリテーター

「会議を中立的立場で効率よく進める進行役」、「組織が成果をあげるよう、人と人との効果的なコミュニケーションの場を作り、一人一人のパワーを最大限に引き出し、多様な考えをまとめつつ、対立から合意形成に導き、実行に向けたモチベーションを高める」役割を担う人

## 2 キーワード2：「開く」

### (1) ポイント3：地域を親子に開く

地域活動への参加を通じて得られる子どもの成長と大人自身の成長、または、地域活動を通して得られた地域が親子の居場所であるという感覚は、地域と関わるという過程の中に埋め込まれている。親子の関係を深めるとは、まさに「過程」が重要である。

乳幼児期を過ぎた親子を対象とした地域活動の場合、子どもたちには自発的活動を、親にはそのサポートという役割を持たせて参加の機会を提供することで、親には自分の子ども以外の子どもとの交流、親同士の交流が生まれることで、そこから発生する横の連帯感が親の達成感につながり、また、子どもにとっては、お父さん再発見、お母さん再発見というかたちで、親子の関わりが深まる循環が生まれる可能性を大事にしたい。

家庭の中で親子がコミュニケーションする場合と、地域の中で親子がコミュニケーションする場合、第三者、他者が親子の間に入ってくることによって、その親は「この子ってこういう子だったんだ」とか、「こういう面があったんだ」というような、色々な面を発見することが大事である。子どもを「育てる」ではなくて、子どもが「育つ」ところを見る、そういう関係性は、地域の中で親子の関係を深めるために大切にしていきたいポイントである。

### (2) ポイント4：地域活動を多様な参加で運営する

地域活動の過程に、協力者として、近隣町内会、子ども会、小学校、NPO、学生ボランティアが加わり、さらに、子どもたちの企画を支援するかたちで親も関わることで、地域活動が親子同士だけでなく、地域の大人も巻き込んだ世代間交流の場となることが重要である。

地域活動を、それぞれができる範囲で役割を担い、参加者にとって負担感のない緩やかな形にしたり、親にも役割を与えることで、自分の子どもだけでなく、地域住民との関わりが広がり深まる循環が生まれる可能性を大事にしたい。

また、子どもたちは、お兄さん、お姉さんとの関わりが楽しく感じられ、大学生などが適任であることや、子どもたちがワークショップを通じ、自分の意見や発想には意味があるということ子どもたちが体感するという機会をつくるなど、子どもたちが、楽しみながら、より主体的に関わることは、地域活動の中で親子の関係を深めるために大切にしていきたいポイントである。

地域での実践をさらに推進していくための提案～地域を開くために～

開かれた地域活動を企画運営できるコーディネーターを育てていこう！  
子どもと大人をつなぐ大学生等と地域とのつながりを育てていこう！

### 3 キーワード3：「遊ぶ」

#### (1) ポイント5：遊びの中で親子の関係を深める

現代においては、「生活 = LIFE」が「仕事 = WORK」に収斂されていってしまい、遊びとか、お祭りとか、大人たちがみんな酒を飲むとか、一緒に共同し、喜びあい、共感するという「PLAY」がどんどんそぎ落とされていく傾向にある。

親子の関係性づくりのための仕掛けに遊びという要素が加わることで、偶然性とか、おもしろさとか、楽しさを共有するような工夫がされることで、親子がそれぞれ自分を開放し、自主性が生まれることで、親子の関わりが深まっていくという可能性を大事にしたい。

地域やコミュニティ、親子にとっても必要な、共感や信頼というものを再生していく文脈においては、言語を越えたもの、実践して体感しないとわからないことが多くあり、遊びを通じてコミュニケーションする、物を一緒に食べてコミュニケーションするという共同作業は、地域の中で親子の関係を深めるために大切にしていきたいポイントである。

#### (2) ポイント6：遊びを子どもがつくる

育てるの“育”、玩具の“玩”、学習の“習”という、学ぶという過程を表す3つの漢字がある。育てるの“育”という字は言葉を通した受身の学び、玩具の“玩”は、物を使って物を通した主体的な学び、学習の“習”は試行錯誤や失敗を通した学び、というそれぞれ違った文脈がある。現代は、どちらかというところ“育”という言葉を通した受身の学びに偏っているのではないだろうか。遊びは“玩”や“習”という、多様な学びの機会を取り戻す上で、重要である。子どもなりに持っている小宇宙は、大人から見たら稚拙だと思えるかもしれないが、任せればそれなりにやるということ、主体的にやるという可能性を大事にしたい。

地域活動の中に遊びという要素を加えることで、「子どもたちでやりたい」という主体性を育て、子どもを中心とした地域と親子のつながりは、地域の中で親子の関係を深めるために大切にしていきたいポイントである。

地域での実践をさらに推進していくための提案

～遊びを通じて深めるために～

子どもの主体性を遊びを通じて育てていこう！

遊びを通じた親子のコミュニケーションを育てていこう！

## 4 おわりに

近年、ひきこもりや不登校、就労困難など、社会生活を円滑に営むことが難しい青少年の問題は深刻な状況にある。

こうした困難を抱える青少年の課題として、コミュニケーション力が不足している、自己肯定感が充たされていない、などが挙げられる。

本協議会では、現代の青少年が困難を抱えている背景を、少子化・核家族化や、地域における人と人との関わりの希薄化など、社会状況の変化が複合的に絡み合いながら、子育てへの不安や負担感の増大や、地域における親子の居場所や多様な人々と関わる機会の喪失によって、地域において青少年を健全に育成する基盤が失われつつあるのではないかと分析した。

こうした地域の抱える課題に対して、地域と親子がつながることで、親子の孤立化を防ぎつつ、地域の再生を目指したいというのが本協議会の意図であった。そのために、地域と親子がつながる場としての地域活動のあり方について、さらに、地域活動を通じて親子の関わりが深まるような工夫について仮説を立て、アンケート調査やモデル事業を通じて検証し、最終的に、3つのキーワード、「つなぐ」、「開く」、「遊ぶ」にまとめ、6つのポイントを提案したところである。

その上で、おわりに、今後、行政に期待される役割を、3つ提言したい。第一に、地域と親子がつながるよう情報共有の場をつくることを提言したい。ITが普及した現代において、まずは、親子の関わりを深める地域活動についてインターネットを活用した情報共有を促進していただきたい。また、地域のつながりは、フェイス・トゥ・フェイスが基本であることから、親子が気軽に参加できる地域イベントの開催の環境づくりを応援していただきたい。この場合、公民館、児童館、青少年施設など、青少年に関わる施設がゆるやかに連携しながら、地域活動を支えていただくことが大切であると考えます。

第二に、地域人材がゆるやかに連携した取組みを進められるよう、コーディネーターやファシリテーターといった新しい役割を担える人材を活用することを提言したい。我が国では、NPO活動が定着し始めており、コーディネーターやファシリテーターといった役割を担うNPOも育ち始めており、こうした民間人材と協働しながら地域活動を支えることで、地域人材の負担を軽くしていくことが重要であると考えます。

第三に、子どもたちが遊びを通じて自発性を発揮できるよう、子どもたちの自主的な遊びを支えていく人材の育成を提言したい。さらに、子どもたちの遊びを通じた経験をより充実させていくために、大学生等を「お兄さん・お姉さん」として交流を促進するような取組みもあわせて提言したい。ボランティアセンターを設置するなどして地域交流を進めている大学も増えており、こうした大学生の取組みと地域の子どもたちをつなげていくことが大切であると考えます。

少子化・核家族化や地域における人と人との関わりの希薄化を背景に、地域の基盤が失われつつある中で、親子、地域活動の実践者、学校関係者のみに本協議会から提案をするのみでは実現は難しい。地域住民に行政が寄り添いながら、失われつつある地域の基盤を補完するかたちで、地域活動を支えていくことを期待したい。

# 参 考 编

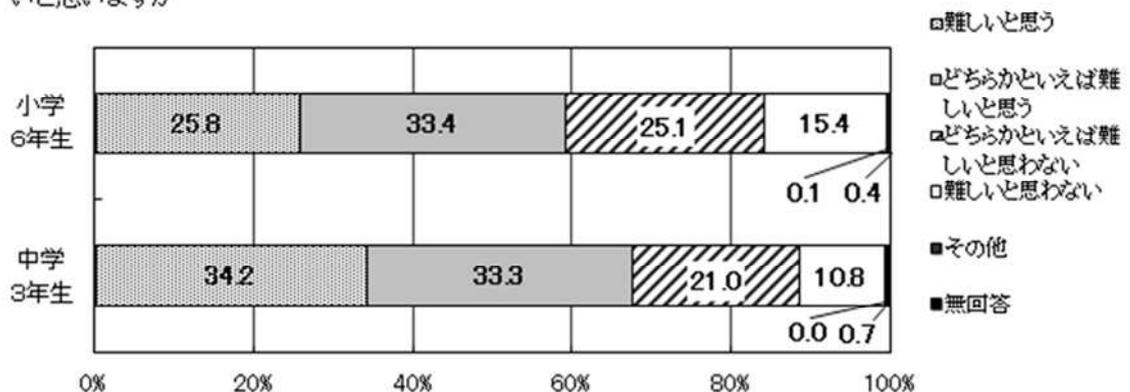
## 審議テーマに関する説明図表

### (1) 青少年のコミュニケーション力の不足

#### 自分の考えを表現することの難しさ

全国の小学6年生及び中学3年生を対象に行った調査によると、「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思いますか」という問いに対して「難しいと思う」「どちらかといえば、難しいと思う」の割合が、小学6年生で59.2%、中学3年生で67.5%となっている。半数以上の子どもが、自分の考えを表現することの難しさを感じており、学年が上がるとその割合も高くなっている。

学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思いますか

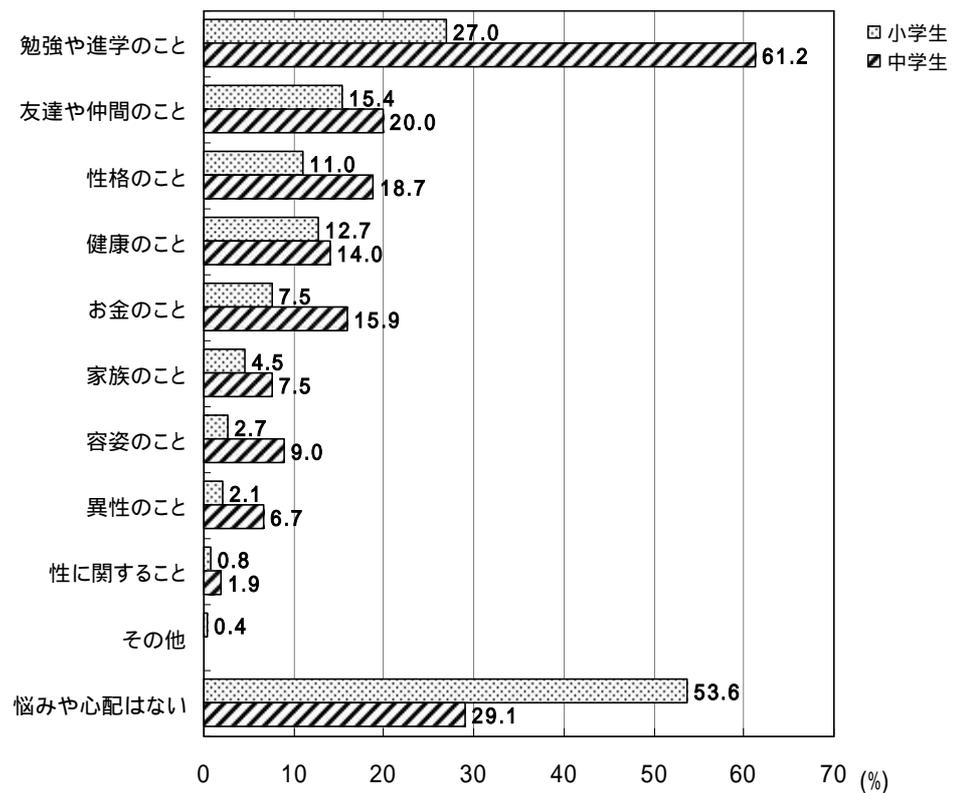


(平成25年度 全国学力・学習状況調査 文部科学省)

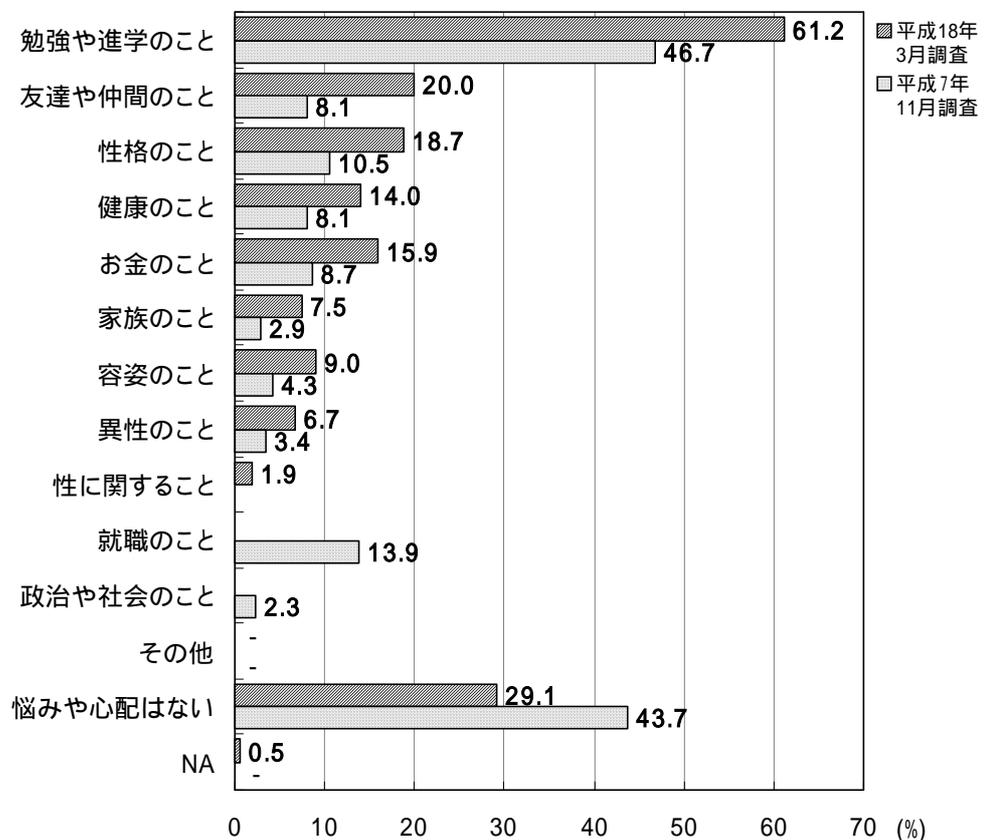
#### 対人関係の悩み

全国の9～14歳までの青少年及びその保護者を対象とした調査によると、悩みや心配事について「友達や仲間のこと」について悩む割合が、小学生よりも中学生のほうが高い。また、中学生の回答について、平成7年11月調査の結果と比較すると、「友達や仲間のこと」について悩む割合が約2.5倍となっている。

あなたは、悩みや心配事がありますか。  
この中からいくつでも挙げてください。



あなたは、悩みや心配事がありますか。  
この中からいくつでも挙げてください。(中学生の回答)



(低年齢少年の生活と意識に関する調査 平成19年2月 内閣府)

## (2) 青少年の自己肯定感の低下

日本、米国、中国、韓国の高校1～3年生に対して行われた調査によると、「私は価値のある人間だと思う」という問いに対して、「全くそうだ」「まあそうだ」の割合の合計が、米国が89.1%、中国が87.7%、韓国が75.1%であるのに対し、日本は36.1%となっている。

また「私は自分を肯定的に評価するほうだ」「私は自分に満足している」という問いに対しても、日本は「全くそうだ」「まあそうだ」の割合の合計が4カ国で最も低く、米国と中国の高校生は自己肯定感(自尊感情)が高く、日本の高校生が最も低い結果となっている。

### ①私は価値のある人間だと思う (%)

	日本	米国	中国	韓国
全くそうだ	7.5	57.2	42.2	20.2
まあそうだ	28.6	31.9	45.5	54.9
あまりそうではない	46.0	6.4	10.2	20.4
全然そうではない	16.7	3.2	1.8	4.3
無回答	1.3	1.3	0.3	0.2

### ②私は自分を肯定的に評価するほうだ (%)

	日本	米国	中国	韓国
全くそうだ	6.2	41.2	38.0	18.9
まあそうだ	30.8	35.0	44.6	51.6
あまりそうではない	46.2	17.5	16.0	24.7
全然そうではない	15.3	4.5	1.1	4.5
無回答	1.5	1.7	0.3	0.3

### ③私は自分に満足している (%)

	日本	米国	中国	韓国
全くそうだ	3.9	41.6	21.9	14.9
まあそうだ	20.8	36.6	46.6	48.4
あまりそうではない	44.6	15.7	27.2	29.8
全然そうではない	29.6	4.6	4.0	6.7
無回答	1.2	1.4	0.3	0.2

(「高校生の心と体の健康に関する調査」 平成23年2月(財)日本青少年研究所)

(3) 少子化、核家族化の進行

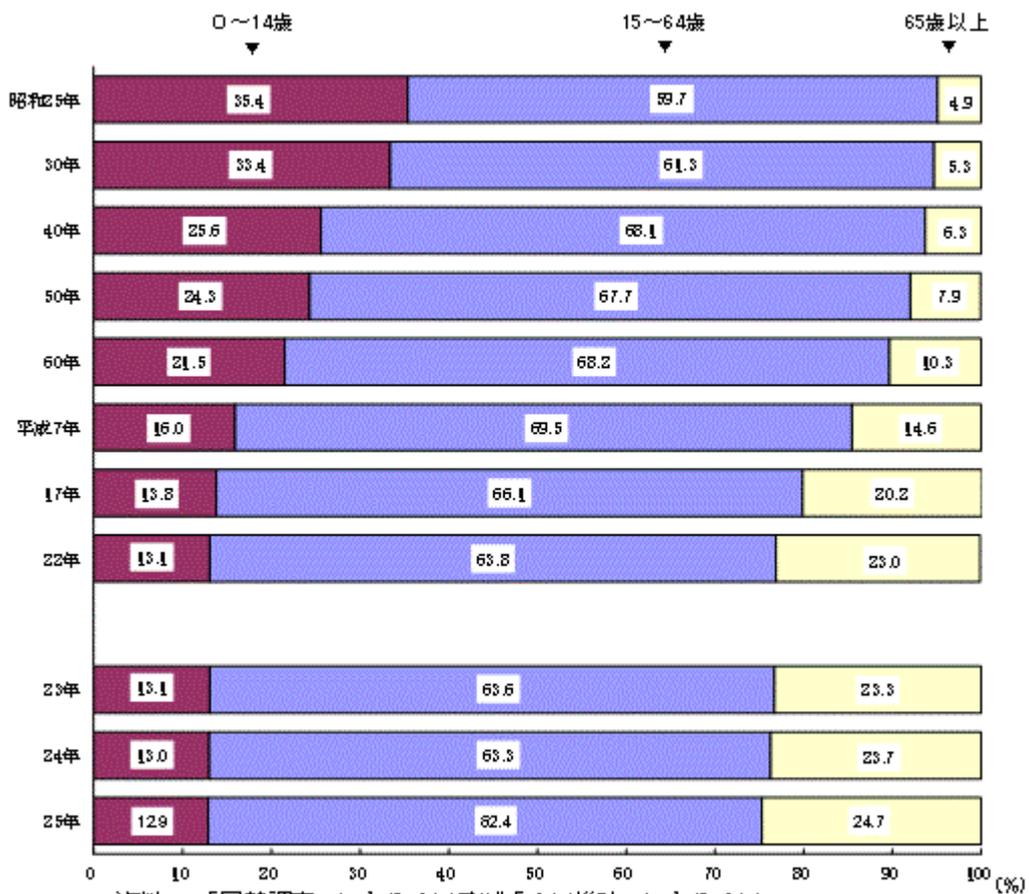
人口に占める子ども（15歳未満）の割合の減少

子どもの割合は、昭和25年には総人口の3分の1を超えていたが、第1次ベビーブーム期（昭和22～24年）の後、出生児数の減少を反映して低下を続け、昭和40年には総人口の約4分の1となった。

その後、第2次ベビーブーム期（昭和46～49年）の出生児数の増加によって僅かに上昇したものの、昭和50年から再び低下を続け、平成9年には65歳以上人口の割合（15.7%）を下回って15.3%となり、平成25年は12.9%（前年比0.1ポイント低下）で過去最低となった。

なお、子どもの割合は、昭和50年から39年連続して低下している。

図2 年齢3区分別人口の割合の推移



資料：「国勢調査」による人口及び「人口推計」による人口

注）平成24年及び25年は4月1日現在、その他は10月1日現在

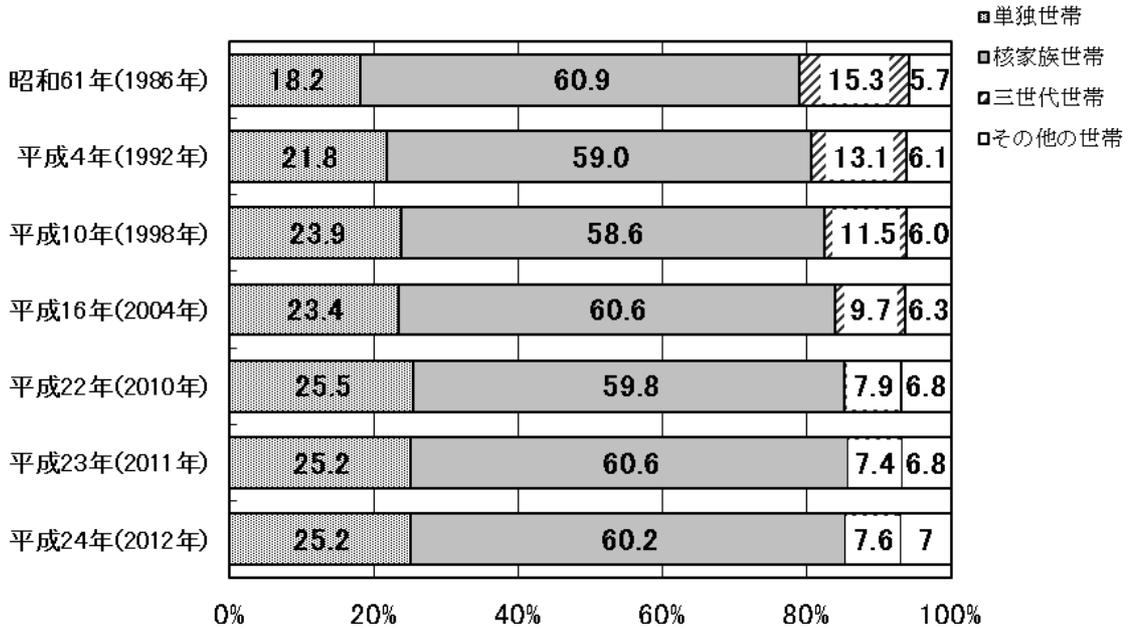
（「統計トピックス No.70 我が国のこどもの数 - 『こどもの日』にちなんで」  
平成25年5月 総務省統計局）

## 核家族化の進行

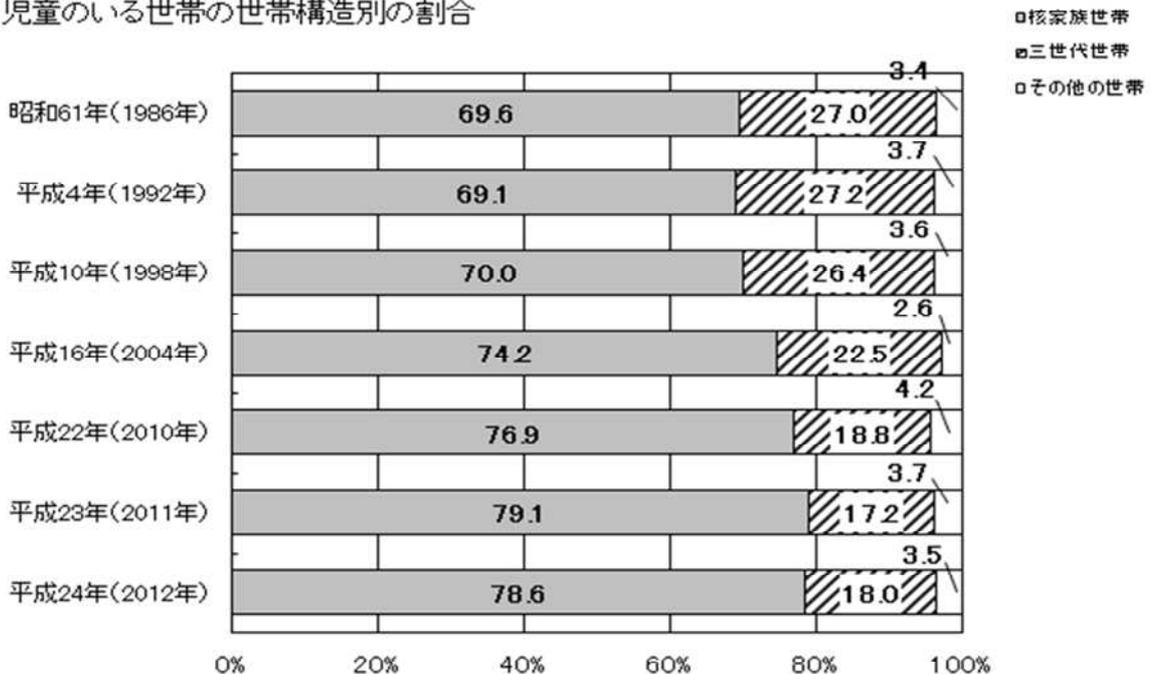
平成 24 年の世帯総数（福島県を除く）に占める核家族世帯の割合は 60.2% であり、単独世帯が 25.2%、三世帯世帯が 7.6% となっている。全体的な傾向として単独世帯が増え、三世帯世帯が減っている。

また、平成 24 年の児童のいる世帯は全世帯の 24.9% であり、世帯構造別にみると、核家族世帯の割合は 78.6%、三世帯世帯が 18.0% となっている。全体的な傾向として核家族世帯が増え、三世帯世帯が減っている。

世帯構造別の割合（全体）



児童のいる世帯の世帯構造別の割合



平成 24 年 国民生活基礎調査 厚生労働省

（平成 23 年の世帯総数は岩手県、宮城県及び福島県を除く）

#### (4) 家庭における子育て不安の増大

全国の18歳未満の児童のいる世帯を対象に行った調査によると、子育てについて「特に不安や悩みはない」と答えた割合が、平成21年は平成16年に比べて半分以下となっており、子育てに不安や悩みを持つ世帯が増加している。

また、不安や悩みの種類別にみても、ほとんどの項目で割合が高くなっており、子育てに関する不安や悩みが増大している。

子育てについての不安や悩み（複数回答） (%)

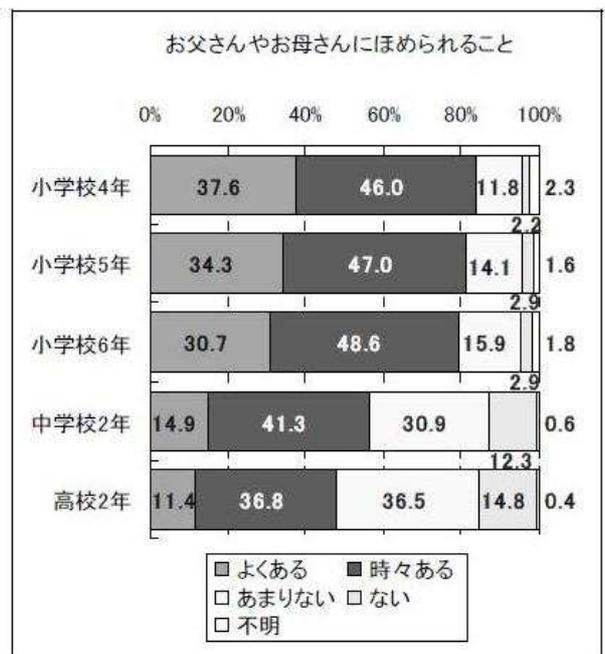
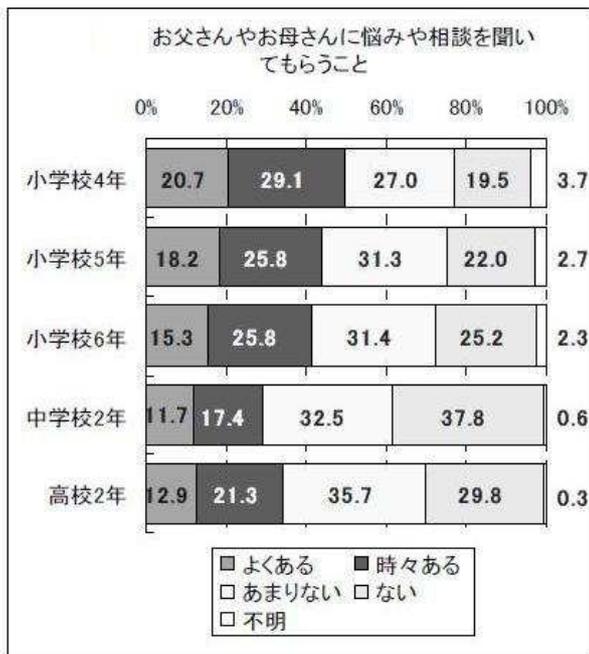
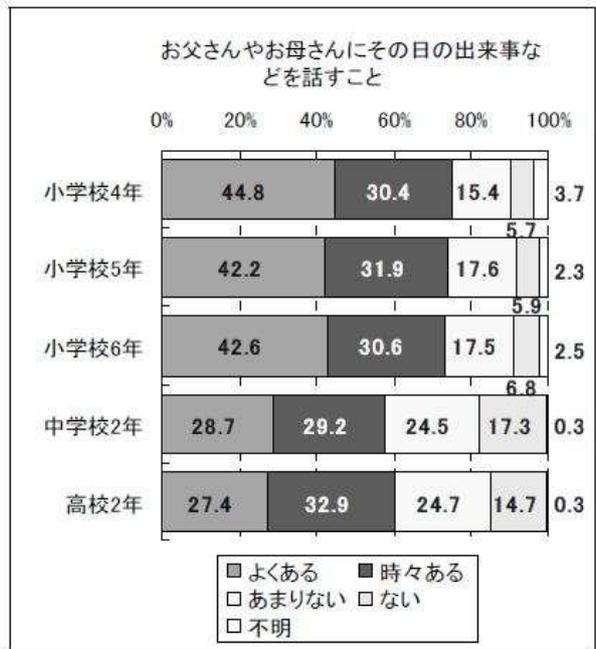
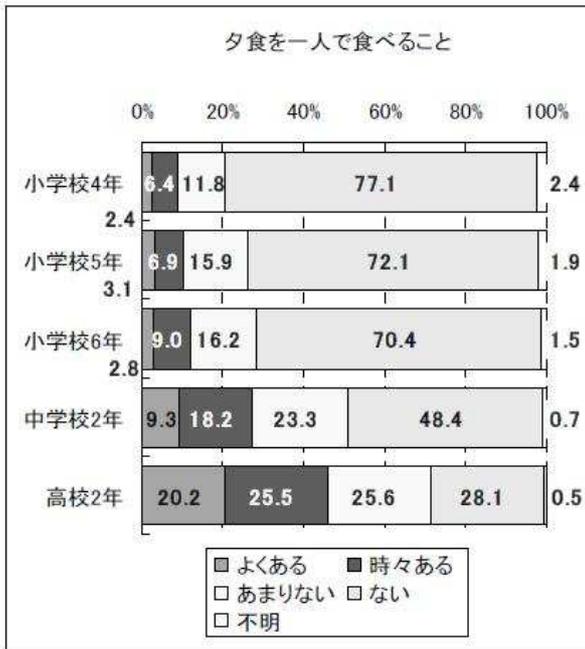
不安や悩みの種類	平成16年 (2004年)	平成21年 (2009年)
子どものしつけに関すること	52.3	53.4
子どもの健康に関すること	30.9	33.5
子どもの勉強や進学に関すること	54.8	56.5
子どもの就職に関すること	16.4	22.1
子どもの性格や癖に関すること	40.5	44.5
子どもの暴力や非行に関すること	5.1	6.5
子どものいじめに関すること	11.2	14.2
子どもの友人に関すること	17.9	21.5
子どもの性に関すること	7.4	7.9
子どもが保育園や幼稚園、学校に行くのを嫌がること	6.3	6.9
子どもの育て方について自信が持てないこと	21.4	21.4
子どもの事に関して家族が協力してくれないこと	8.3	10.0
家の近所の環境がよくないこと	6.3	5.3
その他	0.9	1.2
特に不安や悩みはない	16.4	5.9

(平成21年度全国家庭児童調査 厚生労働省)

(5) 家庭内コミュニケーションの減少

全国の小学1～6年生、中学2年生、高校2年生に対して行った調査によると、学年が上がるにつれて、「夕食を一人で食べること」について「よくある」「時々ある」の割合が高くなる。

また、お父さんやお母さんに「その日の出来事などを話すこと」「悩みや相談を聞いてもらうこと」「ほめられること」について、若干ばらつきがあるものの、全体的には、学年が上がるにつれ「よくある」「時々ある」の割合が低くなる傾向が見られる。



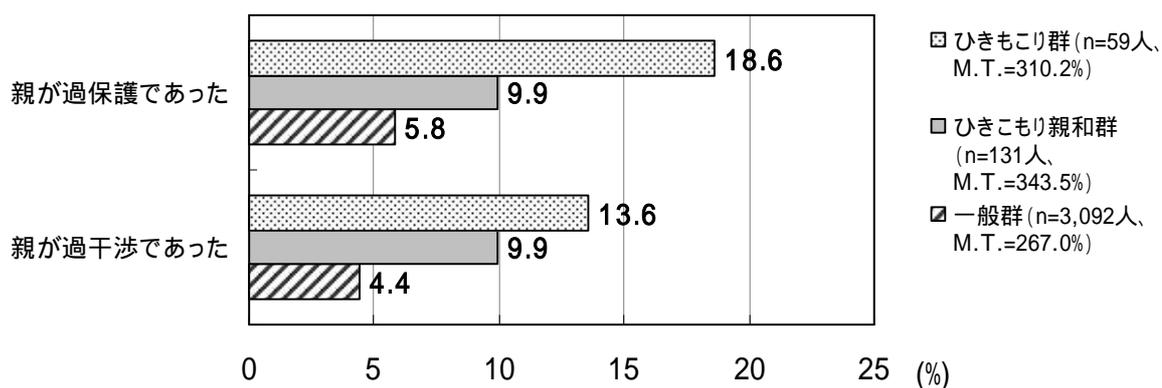
(「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」 平成23年11月  
(独)国立青少年教育振興機構)

(6) 過干渉、子離れできないなどの親子間の問題の影響

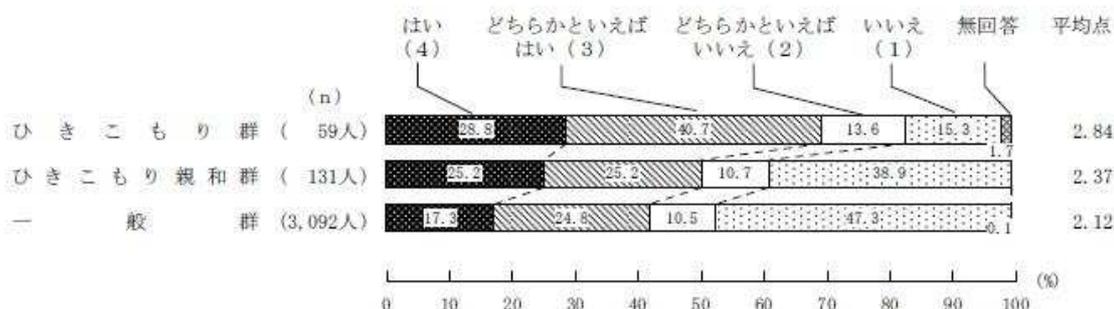
全国の15～39歳に対して行われた調査によると、小中学校時代の家庭での経験として「親が過保護であった」「親が過干渉であった」に当てはまる割合は、一般群に比べてひきこもり群\*、ひきこもり親和群\*では高い。

また、「身の回りのことは親にしてもらっている」「食事や掃除は親まかせである」という問いに対しても「はい」「どちらかといえばはい」の割合が、一般群に比べてひきこもり群、ひきこもり親和群では高い。

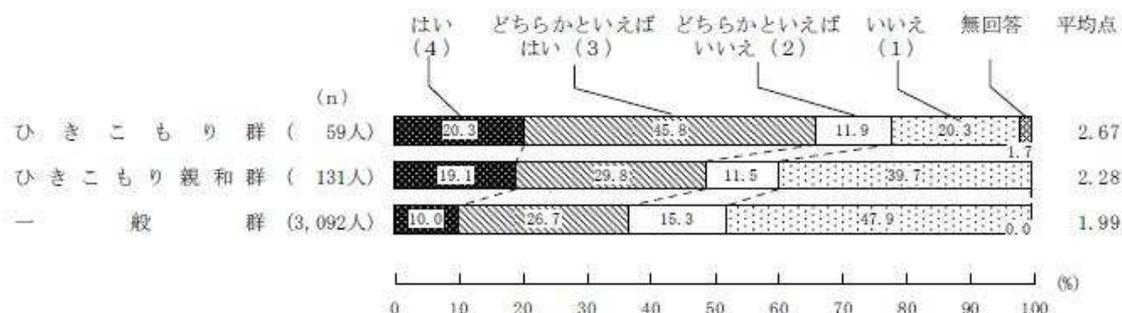
あなたは小学校や中学校の頃に、家庭で次のようなことを経験したことがありますか。あてはまるものすべてにをつけてください。(はいいくつでも)



身の回りのことは親にしてもらっている



食事や掃除は親任せである



(「若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)」平成22年7月 内閣府)

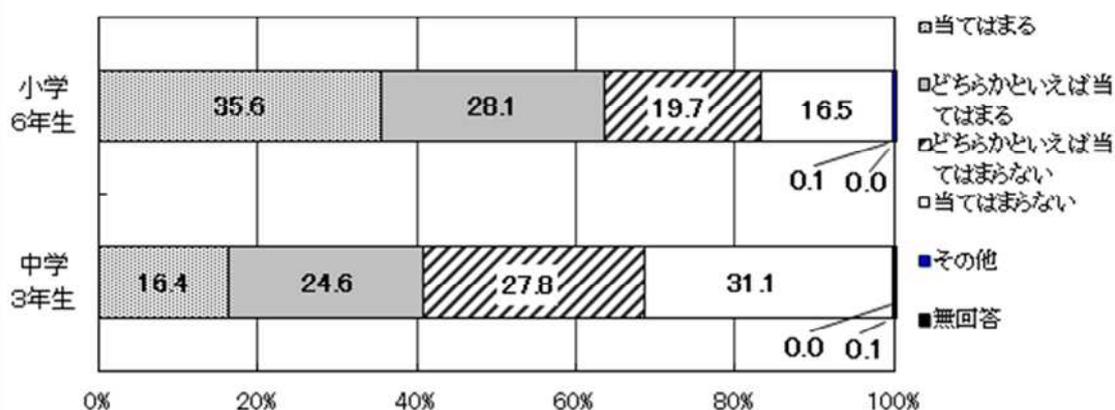
\* 本調査では、「普段どのくらい外出しますか」という問いについて、趣味の用事の時や近所のコンビニには出かける、または家や自室から出ないと回答し、現在の状態が6ヶ月以上続いていて、病気療養中や家事・育児に専念している等の回答を除いた者を「ひきこもり群」としている。また、ひきこもり群以外で「自分も家や自室に閉じこもりたいと思うことがある」等の問いに「はい」と答えた者を「ひきこもり親和群」、それ以外の回答者を「一般群」と定義している。

## (7) 地域とのつながりの希薄化

### 地域の行事への参加状況

全国の小学6年生及び中学3年生を対象に行った調査によると、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という問いに対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の割合は、小学6年生が約6割であるのに対し、中学生は約4割と低下している。

今住んでいる地域の行事に参加していますか



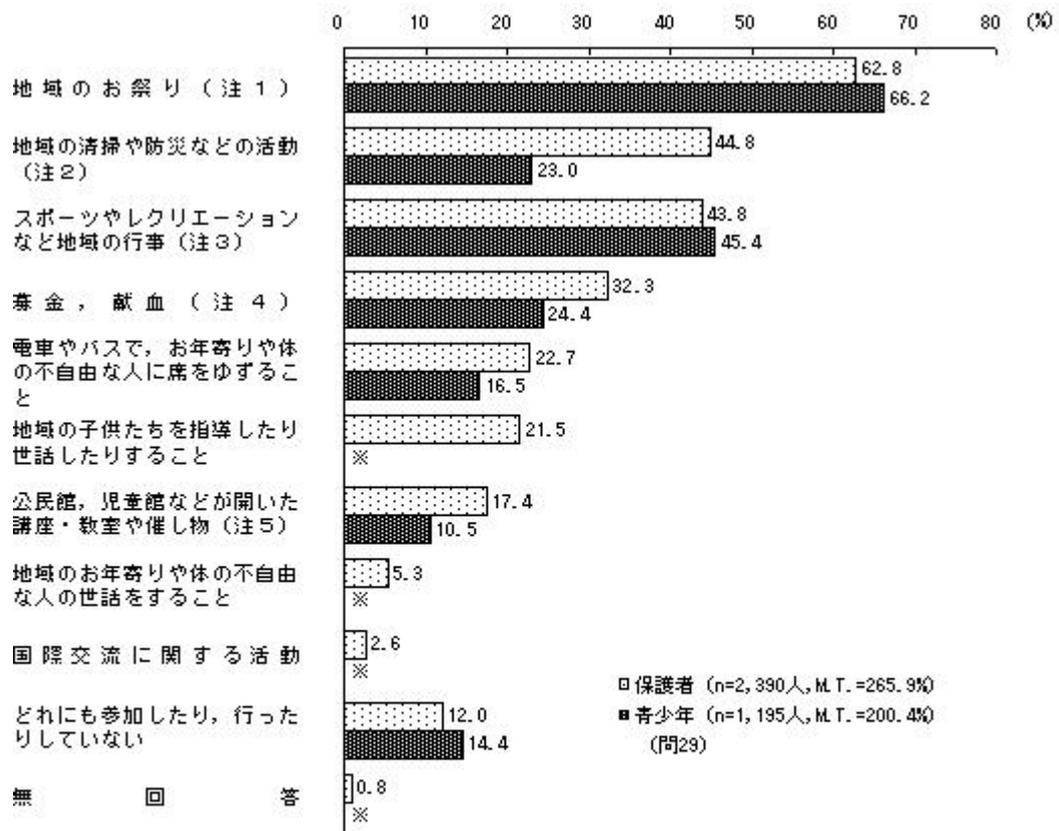
(平成25年度 全国学力・学習状況調査 文部科学省)

### 地域活動への参加状況

全国の9～14歳までの青少年及びその保護者を対象とした調査によると、最近1年間で、住んでいる地域において参加したり行ったりした活動があるかという問いに対して、保護者は「地域のお祭り」「地域の清掃や防災などの活動」などに参加した割合が高く、「どれにも参加したり、行ったりしていない」の割合は12.0%である。

また、青少年は「近所のお祭り」「子ども会や町内会などの行事」に参加した割合が高く、「どれにも参加したり、行ったりしていない」の割合は14.4%である。

最近1年間で、住んでいる町や村で、次のような活動に参加したり、行ったりしたことがありますか。この中からいくつでも挙げてください。



- (注1) 青少年調査では、「近所のお祭り」となっている。  
 (注2) 青少年調査では、「公園や道路などのそうじ, 町や村のひなん訓練など」となっている。  
 (注3) 青少年調査では、「子供会, 町内会などが開いた運動会, クリスマス会などの行事」となっている。  
 (注4) 青少年調査では、「募金」となっている。  
 (注5) 青少年調査では、「児童館, 公民館などが開いた講座や教室」となっている。

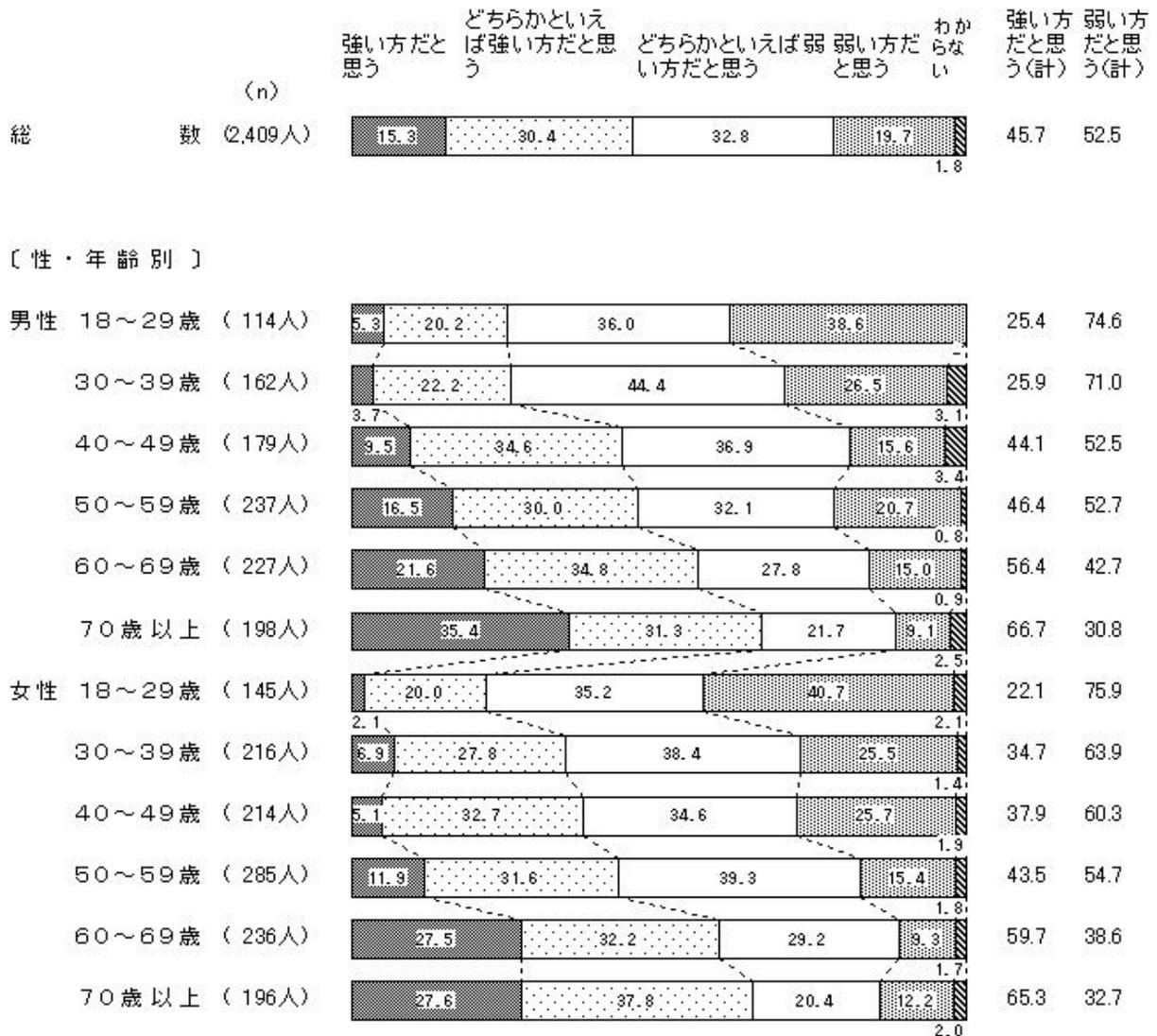
保護者調査と青少年調査で、質問文(選択肢の文章)が一部異なるもの、又はどちらか一方のみ質問しているものを示す。

(「低年齢少年の生活と意識に関する調査」平成19年2月 内閣府)

## 地域の人たちとのつながりの希薄化

全国の18歳以上の者を対象に地域の人たちとのつながりについて聞いたところ、「強い方だと思う」「どちらかといえば強い方だと思う」の割合が45.7%であるのに対し、「どちらかといえば弱い方だと思う」「弱い方だと思う」の割合は52.5%と高くなっている。

また、性・年齢別に見ると、男女を問わず、年齢が低くなるにつれて、「強い方だと思う」「どちらかといえば強い方だと思う」の割合が減少しており、18～29歳では7割以上が「どちらかといえば弱い方だと思う」「弱い方だと思う」となっている。



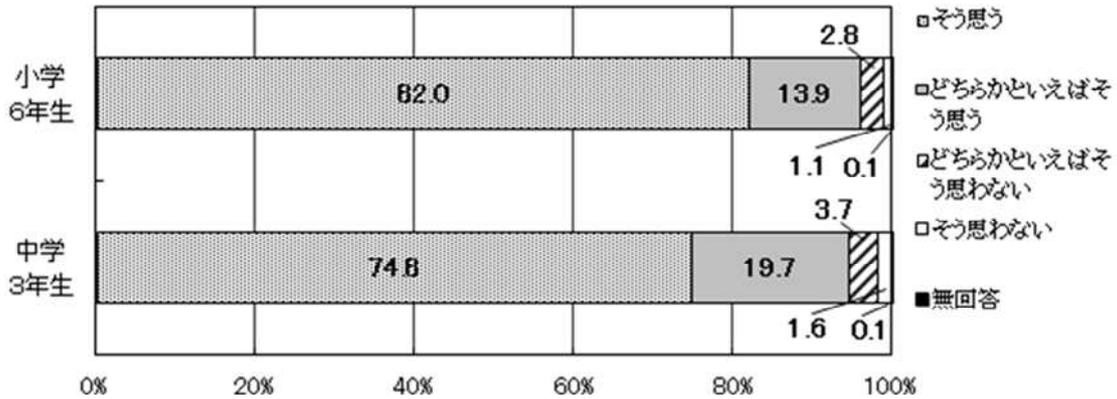
(「少子化対策と家族・地域の絆に関する意識調査」 平成19年2月 内閣府)

(8) 子どもの親密圏の縮小、世代間交流の減少

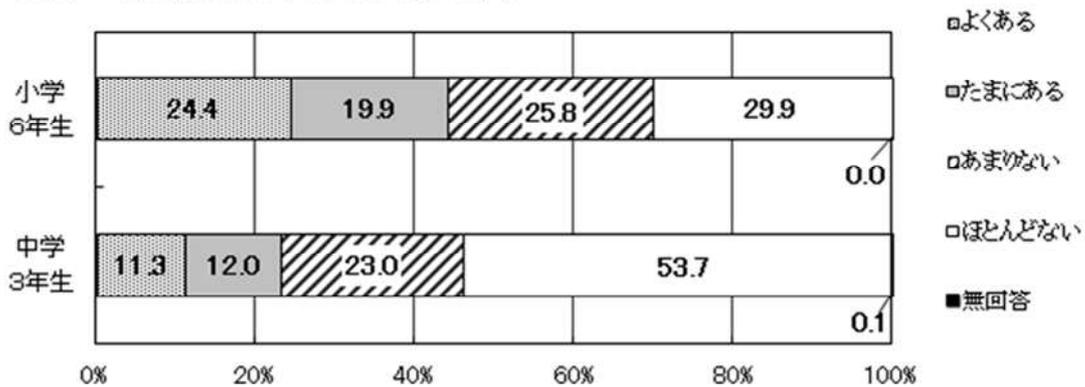
全国の小学6年生及び中学3年生を対象に行った調査によると、「学校で友達に会うのは楽しいと思いますか」という問いに対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の割合が、小学6年生よりも中学3年生の方が低くなっている。

また「地域の大人(学校や塾・習い事の先生除く)に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがありますか」という問いについても、「よくある」「たまにある」の割合が小学6年生よりも中学3年生の方が低くなっており、「年上や年下の友達と一緒に遊んだり、勉強したりすることがありますか」という問いについては、「よくある」「たまにある」の割合が、小学6年生と中学3年生とは大幅に異なるなど、学年が上がるにつれ親密圏が縮小し、世代間交流が少なくなっている。

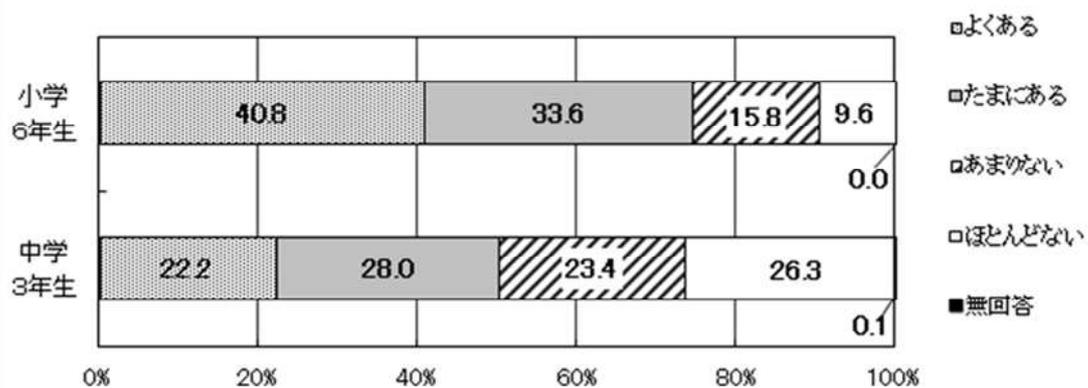
①学校で友達に会うのは楽しいと思いますか



②地域の大人(学校や塾・習い事の先生除く)に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがありますか



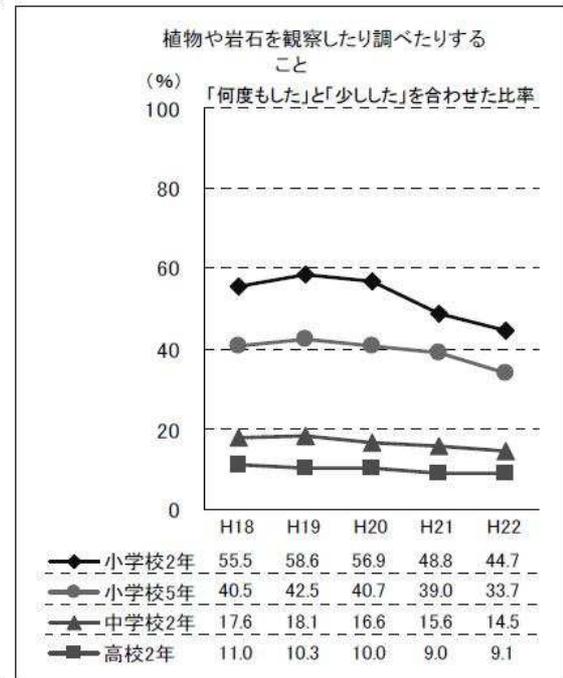
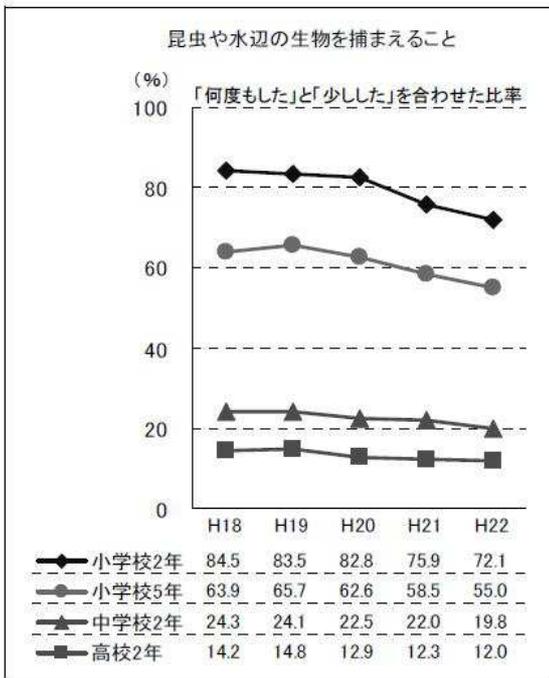
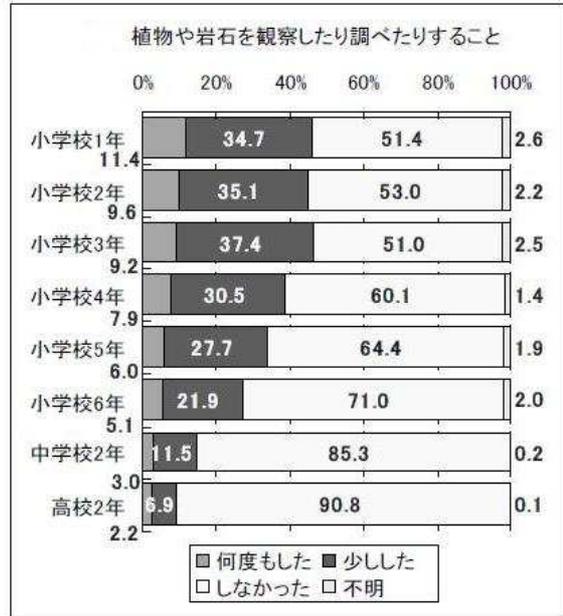
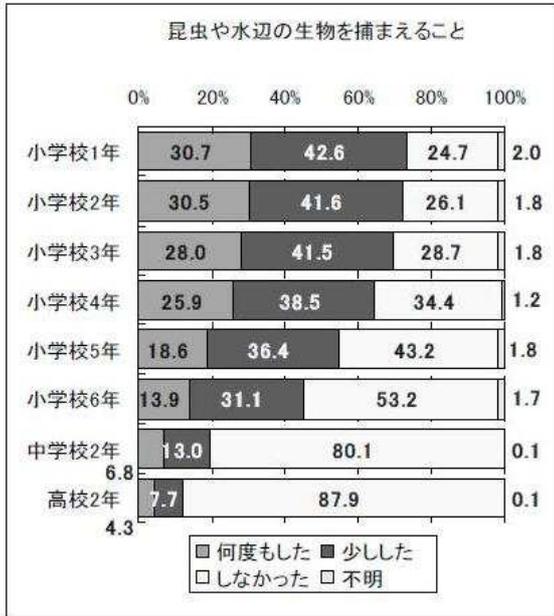
③ 年上や年下の友達と一緒に遊んだり、勉強したりすることがありますか



(平成25年度 全国学力・学習状況調査 文部科学省)

(9) 青少年の体験活動の機会の減少

全国の小学1～6年生、中学2年生、高校2年生に対して行った調査によると、青少年の自然体験活動の実施率は、学年が上がるにつれて減少しており、ここ5年間の「何度もした」「少しした」の割合の動向を見ても減少傾向にある。



(「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」(平成22年度調査)  
平成23年11月発表 (独)国立青少年教育振興機構)

# 資料編

平成24・25年期神奈川県青少年問題協議会審議経過

開催日	会議	主な審議内容
平成24年 9月19日(水)	第1回協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・副会長の選出について</li> <li>・企画調整部会委員の選出について</li> <li>・平成24・25年期の審議テーマについて</li> </ul>
同日	第1回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部会長、副部会長の選出について</li> <li>・協議スケジュールについて</li> <li>・委員意見発表、意見交換</li> </ul>
10月17日(水)	第2回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・委員意見発表、意見交換</li> <li>・課題整理等</li> <li>・平成24年度神奈川県青少年育成活動推進者表彰受賞者について</li> <li>・県民の皆さんとの意見交換について</li> </ul>
2月13日(水)	第3回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・&lt;報告事項&gt;県民の皆さんとの意見交換会について</li> <li>・中間報告(案)について</li> <li>・平成25年度の展開について</li> </ul>
3月22日(金)	第2回協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企画調整部会中間報告について</li> </ul>
同日	第4回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子の関わりを深めることができる地域活動・プログラム事例の調査について</li> <li>・地域活動の中で親子の関わりを深めるポイントを実践・検証するためのモデル事業について</li> </ul>
平成25年 7月2日(火)	第5回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子の関わりを深めることができる地域活動・プログラム事例調査について</li> <li>・地域活動の中で親子の関わりを深めるポイントを実践・検証するためのモデル事業について</li> </ul>
8月2日(金)	第6回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第3回協議会への報告事項について</li> <li>・親子の関わりを深めることができる地域活動・プログラム事例調査について</li> <li>・最終報告の骨子について</li> </ul>
同日	第3回協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・改選委員の委嘱</li> <li>・「地域で深める親子の関わり～子どもを中心につなごう！地域と親子」をテーマにした企画調整部会における審議の進捗状況について</li> </ul>
9月28日(土)	第7回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子の関わりを深める地域活動の実践</li> </ul>
11月6日(水)	第8回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・&lt;報告事項&gt;第7回企画調整部会 モデル事業「蒔田公園で遊ぼう！OneDAYキッズパーク」について</li> <li>・最終報告(素案)について</li> <li>・普及啓発資料(素案)について</li> <li>・平成25年度神奈川県青少年育成活動推進者表彰候補者について</li> </ul>
平成26年 1月22日(水)	第9回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終報告(案)について</li> <li>・普及啓発資料(案)について</li> </ul>
同日	第4回協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終報告(案)について</li> </ul>

平成 24・25 年期神奈川県青少年問題協議会委員

会 長	黒岩 祐治	(神奈川県知事)
副 会 長	笹井 宏益	(現職 国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部長) * (前職 国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部統括研究官)
部 会 長	高橋 勝	(帝京大学大学院教授・教職研究科長) *
副部会長	伊志嶺 美津子	(現職 NPO法人子ども家庭リソースセンターNP部門代表) * (前職 浦和大学教授)
委 員	入江 礼子	(共立女子大学教授) *
	小川 久仁子	(神奈川県議会議員 平成 25 年 7 月 20 日 ~ )
	加藤 元弥	(神奈川県議会議員 ~平成 25 年 7 月 19 日)
	岸 裕司	(秋津コミュニティ顧問/埼玉大学教育学部 非常勤講師) *
	岸部 都	(神奈川県議会議員 平成 25 年 7 月 20 日 ~ )
	小泉 裕子	(鎌倉女子大学教授) *
	嶋村 仁志	(TOKYO PLAY 代表/日本冒険遊び場づくり協会理事) *
	田中 靖子	(公募委員(特定非営利活動法人教育支援協会職員)) *
	松田 良昭	(神奈川県児童福祉審議会委員長)
	山下 昌一朗	(神奈川県議会議員 ~平成 25 年 7 月 19 日)
	渡邊 英則	(学校法人渡辺学園理事長) *

○任期は平成 24 年 7 月 20 日 ~平成 26 年 7 月 19 日

○\* 印は企画調整部会委員



神奈川県

青少年課

横浜市中区日本大通 1 〒231-8588 電話(045)210-3840 (直通)